

二宮尊徳

前篇

6
7

63-39



尊德

前篇

興風叢書第二卷

內務大臣男爵 平田東助君題辭
文部大臣 小松原英太郎君序
家庭學校長 留岡幸助君序

碧瑠璃園君作
渡邊審也君裝畫

明治
42 1 29
肉空

王也

王也
西漢

王也

西漢

王也

西漢

巖に興風叢書第一卷渡邊華山出で、青年子女の志
を立て、行を改むるもの頗る多しと聞く、今又第二卷
として「二宮尊徳」世に出でんとす披いて之を見るに、
翁の至誠は脈々人を動かす、翁の風采は紙上に躍如
たるを覺ゆ、蓋し翁の教訓は天地自然の理を述べて、
之を人事の上に活用したるもの、孰れの世にか通ぜ
ざらん、孰れの時にか適せざらん、而かも人心動もす
れば浮華に流れんとする方今の時に於いて、之を發
揮するの益々必要なるを感ず、若し本書の世に行は

るゝに至らば其の風を興し俗を易ふるに補あること復言を要せざるべし、書成るに及んで序を予に求め、仍りて書して之を興ふと云爾。

明治四十二年一月

小松原英太郎

碧瑠璃園君曩に『渡邊華山』をものして民風を作興し、今又『二宮尊徳』を著はして世道に資せんとす、予固と小説の作成に何等の因縁なしと雖も、社會教育の理想が寄席演劇小説の改善にあるを以て本書の公刊せらるゝを聞くに及びては欣喜措く能はざるの情あり。書中敘する所、二宮翁幼時の慘苦、逆境に處する確固たる精神、更に將來に向上せんと欲する奮發心は著者縦横の筆を以て遺憾なく發揮せられたり。本書一たび世に出づるあらば讀者を補益せんこと予

の深く信じて疑はざる所なり、一言を敘して本書の
發刊を祝す。

明治四十二年一月下浣

於家庭學校書齋
留岡幸助



二宮尊徳翁



二宮尊徳

碧瑠璃園

第一章

(一)

「御代々へ申し上げます、利右衛門恐れながら御代々の御位牌へ申し上げます」

秋の日は暮れんとして未だ暮れず、西の庇に夕陽の光り力なく昏く時、佛壇に燈火點して、阿彌陀如來の前に金子二兩を置き、微れる如き聲に斯く云ひて、骨と皮ばかりに瘦せ衰れたる兩手を合すは、この家の主利右衛門なり、年は早や五十を越えてやわちん、霜を抽んずる鬢は尖りたる頬骨の上にかゝりて、凹みたる眼の中きらくと露に光る、幾度か云はんとしては口恐り、又云はんとしては逡巡しつゝ、

「御代々様、どうぞ恕して下さりませ、私は誠に悪いことを致しました、富むも貧せるも、時代なれば致し方がござりませぬが、田地畑はみな御代々の物でござります、私の力で買ふたものではござりませぬ、それを今度の病氣――去年の冬から引き續いての病氣に、藥禮の滞りが澤山出さした、私の病氣を治くする爲めに、御代々の田地を手渡すのは、まこと道に外れたことではござりませぬが、さりとて醫者殿へ禮をせずには居られませぬ、由て濟まぬ事と存じながら、田地を賣却してござります、此處にある二兩の金はその田地の代でござります、私は唯今からこれを持つて、藥禮を濟まして参ります、どうぞ御勘辨下さりませ」

佛壇の御燈火は利右衛門の心を諒とするが如く風に點頭きぬ、先祖代々の位牌の上には、鶴の燭臺黒き影を作りて横はりぬ、利右衛門は尙合掌せるまゝなりき

「御代々も御存じとは察します、寛政三年酒匂川洪水の時には、當家の田畑一畝も残らず石河原となつて、三五年の間は一粒の米も收ること能きませぬ」

なんだ、その間の貧苦、三人の子供を抱えて、朝夕の飢渴に迫る苦しきは、今お話し申すも涙の種でござります、その中で僅に田地らしい田地にした土地を、今度又人手に渡したのでござります、この二兩のお金があれば、金次郎に着物の一枚も着せることが能きます、三郎左衛門や富次郎に、餅の一日も搦いて遣ることが能きます、それを私一人の病氣の藥禮にさし出すは、何んとも早や身を切るやうに思ふのでござります、然し醫者殿へ義理を缺くことは能きませぬ、子供の養育には身の肉を殺ぎましても、世間の義理は盡さねばなりません、恐れながら暫時田地を借用致します、暫くこの二兩のお金を借用致します、どうぞお恕しなされて下さりませや」

利右衛門は斯う云ひながら、その二兩を手早く懐中して、後をも見ず門前へ駆け出しき

金次郎が十四の秋を迎えたる時なりき、父が佛壇の前に平伏して、腸を断つやうに詫びし居れるを、次の間にて詳しく聞きぬ、貧苦と病苦と、三人の子供の愛情に牽かざる、苦しみを見聞きして、宛ら胸を掻きむくらる、やう

に覺えぬ、彼は縁外に立ちて、父の姿の見えざるまで見送りぬ、夕陽は西の山の端に落ちて、遠寺の鐘鐺々と水を渡り来る

「お父様に御安心をお與へ申さねばならぬ、身を粉に砕いても、お父様の御苦勞を除かねばならぬ、お父様は御病中のお身を斯ほどまでに御心配なされてお在でござや」

金次郎は口の中に吐きぬ、父の苦勞を除くには、夜の目も眠らず、家業を勵むにある、草鞋を作りて少しの勞銀を得るにある、彼は深く覺悟して徐かに庭の仕事場に降りぬ、こゝにて夜の更くるまで、草鞋作り繩紮ふが彼の日ごとの課業なりき

物の一瞬あまりを經きと思ふ頃、門前にかやゝと女子供の罵り躁々音聞こえ「芽出度ゝの若松様よ」と節面白く躍り苦み聲もしたりき

金次郎は何事ならんと驚きて立ち出でぬ、夕陽遍く稻田の上を照らす野道に、父の利右衛門は足踏み鳴らし、兩手を舉げて「芽出度ゝの若松様よ」とさも歡びに堪へざるが如く躍り狂ふなりき

金次郎はツと驚きぬ

(一)

金次郎の驚きしは貧苦と病苦とに迫られて、父上亂心したまひしかと思ひたればなりき、つかゝと駈け寄りて

「お父様、お父様」と聲も慄ふばかりに「あなた何んと爲されたのでござります」

「おゝ」と利右衛門は心付きて「金次郎か、やれゝ嬉しや、これでお前にも三郎左衛門にも、衣服買ふて遣ることが能きる」

利右衛門の躍り狂ふ後より、ぞろゝと付き添ひ來りし多くの女子供は「狂人よゝ」と手を拍ちて笑ふなりき、金次郎は清しく鏡を懸けたる如き目にきつと睨みて

「お身達は何を云ふ、これは私のお父様ぢや、私のお父様狂氣など決してなさらぬ、そちらへ行けゝ」

この詞の中にも、利右衛門は面白う手を舞はして、半は宙を行くが如く我家の中へ駆け入りき、金次郎は門の戸をはたと鎖めて、父の前へ進み出でつ

「お父様どう遊ばしたのでございます、何が芽出度うてその様にお悦びなさるのでござります」

沈と見詰めたる目の中には涙さへ溢れて見えき

「嬉しいことがある、歡ばしいことがある、お由も来て聞け、三郎左衛門も来て聞け」

臺所に夕食の用意して居たる妻のお由も、春戸の小川に雑魚獲りて居たる三郎左衛門も、みな利右衛門の前に集りぬ

利右衛門は再び佛間に入りて、二兩の金を阿彌陀如來に供へながら

「これ見、醫者殿へ持つて行つたお金が、再び此處へ戻つて来た、何んと芽出度いことではないか」

枯木とも見ゆる面の上に、嬉しさが春風の如く漲る、金次郎は父の悦ぶ顔

を見るが嬉しく

「お父様、そのお金どう遊ばしたのでござります」

「世に鬼は住まぬものぢや、私がこの金を醫者殿の前へ出して、輕少ながらお藥禮でござります、と云ふと、はて不思議、お前この金を何うして得られたなとお尋ねぢや、それで私は一伍一什をお話し申すと、醫師殿おろくと涙を流され、さて有難いことを聞く、さほど物堅いそなたの頭に何故神様の御宿らせがないであらうぞ、私は今藥禮を受けずとも、一家飢渴に迫ることはないが、お前は傳來の田地を賣つて、明日からどうしやう心ぢや、私はお前の病氣を治くした爲めに、お前に苦勞をさせるのを嬉しう思はぬ、これは取らぬと斯う仰せぢや」

「なれどお醫者様のお藥禮は、お上の御年貢に亞いで大切な務めござります」と妻のお由は口を添えて「お受けなされぬとて、其儘お持ち歸りなされたのは、日頃の御氣質にも似ぬ事と存じます」

「お、それは私も知つて居る、知つて居るからさまぐに申し上げたが、何

うしてもお受けなされぬ、終には強う御立腹の様にも見えたり

「眞にお慈悲深いお醫者様でござりまする喃」とお由は嬉し涙を溢して「金次郎、お前この事を忘れては爲りませぬぞ、お父様のお病氣を治くして下された上、お藥禮をお受けなされぬ、お醫者様のお情を忘れては爲りませぬぞ」金次郎は兩手を膝の上に置きたるのみ、父の詞、母の詞を、身に泌みて聞き居たるが、暫時してきつと顔を擡げて

「決して忘れは致しませぬ、お父様のお受けなされた御恩は、やがて私の恩でござりまする」

「最もお醫者様の仰せにも喃、藥禮を免すのではない、お前もこの村では草分以來聞こえた家柄ぞや、私に藥を施して貰ふたと云はれては、人中へ面も出せまい、由て暫時待つて進ぜる、その金で早速田地を買ひ戻し、随分家業に精を出さつしやれと、斯う仰せぞや」

「愈よ有難いお詞でござります」とお由は幾度も涙を拭ひぬ

「それから又仰せなさるには、人間の貧富は恰ど車の如なものぞや、今はお

前も貧乏して居るが、何時金持ちになるかも知れぬ、お前の家が元のやうに、生活向きがよくなつたら、その時きつと返して貰ふ、今度の藥禮はそれまでお前に貸して置くと、それはく親切に仰せ下された、其處でこの二兩の金ぞやが喃」と利右衛門は改めて佛壇の上を見返りぬ

御燈火は早や消えて、香の烟のみたよくと棚引く下に、二兩の黄金は燦然と光りてありき、利右衛門はそれを取り上げて

「これを何うする、この金を何うする、お醫者様は早速田地を買ひ戻せと仰せなされたが、私はそれよりも、金次郎に着物が一枚買ふて遣りたいと思ふのぞや、今はまだこれでも濟むが、追々寒風が立つて來ると、敝れた單一枚では凌ぐこともなるまいてや、又三郎左衛門も爾うぞや、餘所の子供は、それ祭禮、それ雨祝ひ、それ盆よ正月よと、白い餅も春いて貰ふが、こんな者を親に持つたばかりで、美味い餅一つ食べたこともない、考えると不憫さうぞや、由て一白は餅でも搗いて……のッ、私の病氣の全快祝ひに……實を云ふと、私も好きな酒が一合飲みたいのぞや」と云ひかけて頭を掻く

「金次郎もこれでは秋が越されませぬ、三郎左衛門は兎も角も富次郎が生れた時、村の衆から御祝儀を戴いた、その返しが爲てござりませぬ、これで田地を買ひ戻して、耕作を勵んだ所で、高が一反足らずの上田、親子五人の口を過すことは能きませぬ、あなたお心付かせの通り、いつそ他の入用にお使ひなさるがよいかも知れませぬな」とお由も心配の色見えぬ

「お前も爾う思ふか、さらばこれでまづ金次郎の衣服を買ふぢや、爾うしてその残りで餅二白、その又残りで私の祝ひ酒五合ばかり……五合が爲らずば三合でも大事ないわよ」

「何かと云ふと、直ぐお酒の御催促でござりまするな」とお由は何時もない笑を漏らして「これと云ふもお醫者様のお情、金次郎や死ぬまで忘れてたもるなや」

(三)

「お父様、お母様」と金次郎は呼び止めて「私それは不承知でござりまする」

「はて」と利右衛門は目を圓うして「不承知とは喃」

「私衣服は要りませぬ、三郎左衛門も餅食べたいとは云ひませぬ、村の衆へ義理が悪くば、私が戸ごとに参つて、お詫ひ申して参ります、どうぞそのお金で田地をお買ひ戻しなされて下さりませ」

「お前は爾う云ふが、一たん賣つた田地を、すぐ買ひ戻す理由には行かぬ、なにさ、私が健康にさへなればさ、田地の一たんや二たん瞬く間に買ふて見せる」と利右衛門は事も無げなり

「でもござりませうが、それではお醫者様へ濟みませぬ、御代々の御位牌へ濟みませぬ、お醫者様もこのお金で衣服買へとお返しはござりませぬ、私一生の願ひ、どうぞ田地を買ひ戻して下さりませ」と父の前に平伏し云ふ

「それも爾うぢや」と利右衛門は點頭いて「私もお慈悲の籠つたお金、外々へ使ひたくはないけれど、そなたの姿を見るにつけて、衣服一まい着せて遣りたい、又三郎左衛門にも餅が一度食べさせて遣りたいわいの」

「私や三郎左衛門の爲めに、お醫者様のお慈悲を反古になされては爲りませ

ぬ、これ〜と三郎左衛門を見返つて「こなたそれほどに餅が欲しいか」

三郎左衛門は兄の目に睨み付けられて、力なく頭を垂れ「餅欲しいことはござりませぬ」

「欲しうはないか」

「餅よりは田地が欲しうござります」

「お、惻愴うよう云ふた、田地さへ無事であれば、それから餅が澤山收れる、そなた何時の間に爾う賢うなりやつたな」と嬉しうに頭を撫で、「さてお父様、三郎左衛門もあのやうに云ふて居ります、お父様のお酒の代は私が夜仕事して、きつと一二合は買ふて参ります、どうぞ田地をお買ひ戻し下さりませ」

「金次郎が彼のやうに云ふ、お由どうしたかよからうの」

「金次郎の詞は皆な正しうござりまする、さらばお買ひ戻しとござりまするか」

「ぢやが」と利右衛門は考えて「相手が貫四郎ぢや、返してくれやうか」

「雖にてもあれ、此理由云ふて頼むに、聞かぬことあるまいと心得ます」

「然し、私からは頼み難い」と利右衛門は又考えて「お由、そなた行つてたもるか」

「いえ」と金次郎は勢ひ好く「このお使ひ、私が参りまする」

「そなた貫四郎に逢ふぢやまで」

「今から行つて買ひ戻して参ります」

「それは大儀ぢや、が爾うすればお醫者様へ義理も立つ喃」と利右衛門は紙に包んで「遺失すまいぞや」

「御先祖代々のお紀念、遺失す事はござりませぬ」と金次郎は確と受け取つて、まづ懐の中へ收め、次に取り出せしは、一緡の銅錢なりき「私はどうあらうとも、三郎左衛門はどうあらうとも、お父様お病氣御全快とあるを祝はぬ理由には参りませぬ、これは眞の輕少ながら、これでお酒の一二合、お餅の一片二片お調へなされて下さりませ」

「え」とお由は驚いて「このお金どうしやつたな」

「夜仕事の上に夜仕事した草鞋代でござります」

「そなたの草鞋は、毎日親子が張取る代となる、それに又このお鳥目、何時の間にも仕事しやつた」

「お父様、お母様お寐みなされた後で、毎夜三足づつ草鞋作ります、これがその骨折賃でござります」

「私共が寐てから……」とお由は思はずも目を睨つて「そなた夜仕事しやるかや」

「切めては一本の筆、一枚の紙でも買ふて、お手習ひをしやうと存じ、斯うしてお鳥目を貯めてござります、なれど手習ひは何時でも能きます、私の身體のある限りは又お鳥目も得られます、お父様の御全快祝ひが、二度三度あつてはなりません、これから前は十年も百年も、御無事でお暮らしなされるやう、お祝ひのお酒の代、お役に立てば本望でござります」

實に晴々とせし詞、實に孝心の籠りし詞、利右衛門夫婦は互に顔を見合せぬ



第二章

(一)

貫四郎は村の金満家なり、同時に村の悪魔なり、彼の手に黄金の光り輝きて、彼の心に利欲の雲蔓る、彼は金色にして夜叉なりき、一たび手にしたる物は、幾倍の利を得るにあらざれば放さざりき、右手に捧げたる銀塊は、左手に金塊を獲るにあらざれば放さざりき、あはれ利右衛門は先祖傳來の田地を、この黄金魔に賣り渡せるなり

「お願いでござります」と金次郎は庭の土に手を突くばかり膝を折りて、貫四郎の前に土地の賣戻を頼むなりき、貫四郎は出居の間の格子近く桑の木の烟草盆を控えて、真鍮に雲龍の彫せる大烟管を叩きながら

「お前は誰であつたかな、何處やらで見たやうにも思ふが、とつと思ひ出せいでな」と宛ら犬猫にても見る如き目の色なりき

「私は金次郎でござります、利右衛門の件でござります」

「お、それ、こなた金次郎であつたな、あの利右衛門の子め金次郎であつたな、ちと見ぬ間に甚う成人した、今年は何歳ぢや」

「十四歳に爲ります」

「來年は十五ぢや、十五となれば男一人前、私の家へも手傳ひに來い、給金をどんと遣るにな」

「有難うござります、どうせ人様の御厄介にならねば立ち行かれぬ貧乏人、此上ながらお目掛けられて下さりませ」

「時に今何とやら云ふたのう、利右衛門に買ふた田地に、金の釜が埋めてあると云ふたかの」

「いえ、左様ではござりませぬ、父の申しまするには……」

「まづ待て、私の云ふことを聞け、假しんばそこに金の釜が埋めてあらうとも、私の手へ買ひ取つた田地ぢや、利右衛門へ一文の分前を遣る事ではないぞ」

「決して分前を戴きに參つたのではござりませぬ、父が申しまするには、彼の一反の上田、彼は私の力で買ひ取つた物ではなく、皆先祖から傳つた物でござります」

「それは知れてある、は、それは知れてある、家の礎まで食ひ減らす利右衛門ぢや、自分の力で米一俵買ひ取つたことがあらうかよ、そんな知れ切つたこと云はいで、今日の用向をさらりと云ふがよいではないか」

金次郎は口惜しげに顔を擡げたれど、それに對する詞はなく、聲を正しうして

「今も申す、彼の田地は先祖傳來、いかに貧苦に迫ればとて人手に渡すのは道に外れても居ります」

「それは云はずともぢや、は、それは云はずとも知れてある」

「けれどお醫者様への藥禮、父が長々の病氣を助けられたお醫者様へお禮を致さぬ理由には參りませぬ」

「けれど相手は利右衛門ぢや、そんな義理を思ふやうなものでもないぞ」

「と云ふて貯蓄のお金は無し、身の皮を剥ぐ思ひで、據なく此方の御厄介になつたのでござります、處がお慈悲深いお醫者様、そのお金をお受け取り下

「さらぬのでござります」

「はて、欲を知らぬ裁醫者ぢや、それで如何した」

「世に鬼はござりませぬ、斯うくと云ふ理由で、二兩の金をお返し爲され
たのでござります」

「すると何か、私にその田地を返せと云ふのか」

「一たんお買ひ取りを願つたもの、親共の都合でお戻しを願ひますのは、此
上もない難題とは思ひますが、年來のお知付き、殊にはお醫者様のお情を
思し召して、どうぞ田地をお戻しなされて下さりませ、恐れながら此處へお
金を持つて来て居ります」

「爾うか、その金がいくらある」

「二兩の小判に、手も付けず持参してござります」

「二兩か」

「へえ」

「二兩では可いぬ、此方利息を忘れたな」

(二)

金次郎は驚いて目を睜つて

「あなた何んと被仰りませする喃」

「假へ金を貸した事はなくとも、借りた覚えがある筈ぢや、金には利息と云
ふが付くぞ」

「へえ」

「ぢやに由て、その利息付けて来たかと云ふのぢや」

「左様な物は付けて居りませぬ、なれど二兩のお金は此處にちやんと持つて
居ります」

「え、分らぬ奴ぢや、二兩の金は元金、そればかりではならぬ、外に利息が
二米付く」

「ではござりませうが唯今も申す、お醫者様のお情、父の苦勞を見捨て、は
置かれませぬ、利息の處は私の身體を以て、いかやうにもお返し申します、

此度の處は格別のお慈悲お情を持ちまして、どうぞ御勘辨を願ひます」と

金次郎は遂に大地の上にて坐つて「御恩は一生忘れませぬ」

「身體ばかり大きうても、流石まだ子供ぢやの、肝腎の利息を取らぬで、買

ふた田地を返して居ては、この恩が乾上るわ、それ見、人並優れて大きい、

この恩が乾上るわ、いくら云ふても爲らぬ事ぢや、とつと、返れ」

「では是非ほどに願ひまして、お背き入れござりませぬぢやな」

「何んと云ふても背かれぬ、田地欲しくばそれに二朱の金を付けて來い」と

太い烟を鼻から出した、貫四郎は憎さげなり

金次郎は沈と考ふる

「それよりはその金で酒でも買ふて、利右衛門に飲ませて遣れ、利右衛門は

田地よりも酒の方が好きであらうに、は、は、は」と大笑ひして「良い親を持

つて、そなたも幸福ぢや」

「父上のお酒の代は、私が又どのやうにもして辨へます、田地を買ひ戻して

置きませいでは、お醫者様への義理も立ちませぬ、先祖傳來命よりも大切な

田地賣るほどの手許、二朱の金がある筈はござりませぬ」

「それが無くば思ひ切るぢや、何も私から買ひ戻して呉れるやうと頼んでは

居ぬぢやで嗜」

「あなたのお詞もまんざら御無理ではござりませぬ、由て利息のお金は私の

身體——身體と申してもお役には立ちませぬが、それでも人に敗ける程の事

あるまいと存じます、身體でお返し申しますゆゑ、それは後——後の御相

談になされまして、今日の處は二兩のお金でお賣り戻しを願ひまする」

「……ぢやが私の家に人は要らぬ、飯を食ふ人間より、子を産んでくれる

金の方が望みぢや、協はぬ事を何時までもくどくど云はいで、足許の明い間

にとつと、返りや」

「是非もない事でござります、それでは二朱のお金を稼ぎ貯めて、又お願ひ

に参ります」と金次郎はきつと云ふ、彼は詞と心を盡して、頼むだけの事

を頼みつ、されど貫四郎は背かざりき、貫四郎は不幸にも人間の情を聞くべ

き耳を持たざりき、人情を聞く耳なき者は、黄金見る目のみ鋭きものなり、

耳を掩ふものに人情を説くは要無し、黄金見る目ばかりを持つ者は、須くその目の前に燦とせる光りをさし付けて、而る後に此方希望を遂ぐべきなり、今の身に二朱は大金の中なれど、夜を日についで働かば、塵も積りて山となる時あらざらんや、と金次郎は此時深く覺悟しつ、斯く云ひ切りて身を起さんとする

「これ〜」と貫四郎は呼び止めて「今日ならば二朱ぢや、なれど利には利が食ふ、時後れると三分にも一兩にもなるぞよいか合點か」と念を押して「合點なら歸れ、さても不憫や、年の若いに苦勞をする喃」

(三)

金次郎は二兩の金と、無念の涙と、無限の失望とを懐にして、とぼ〜と家に歸りき、日は早や暮れて、裡面には淋しき燈火の影見え、外の暗には弟三郎左衛門が末弟の富次郎を脊に負ひて、茫然と立てるが目につく「三郎左か」と金次郎は五六間さきより聲を掛け「蚊が螫さうに何をして居

る

「兄様、大變でござります」と云ふ聲常事にてはあらず

「何うした、何うした」と足早に駆け付け「大變とは何んの事ぢや」

「お父様御病氣、兄様のお歸りをお待ち難ねぢや」

「や、何んと云ふ」

云ふ詞の終らぬ中に、彼の身は利右衛門の枕頭に坐りてありき

「お父様、どうなされたのでござります、どうお悪いのでござります」

利右衛門は破れ蒲團の上に横臥して、凹みたる眼を輝すのみ、蒼く土の如くなりたる顔に、一面の盛り掛るは甚しき病苦の身體中を襲へるならん、側にお由は甲斐々々しく腹を摩りてあり

「そなたが出やると問もなく、急に瘴氣がさし込んで、何うしても治らぬ、今お醫者様をお迎え申したが、その分では容易に治くもならぬとのお診斷ぢや、一難越すと又一難、何んといふ情無い事であらうのう」

「それは困つた事でござります、どう爲り行くも、天地自然の勢ひとは申し

ながら、少しも早う御苦痛をお助け申さねば爲りませぬ」

「私もそれを思ふ、お父様には人參が適薬、大體の事は人參一服で御全快なされたものぢやが、それを買ふにはお金が必要」

「御心配なされますな、お錢なら此處にござります」

「そなたまだ持つて居やるぢやの」

「お醫者様のお情、二兩の金を持つて居ります」

「それではやつぱり賣り戻して呉れぬぢやな」

「利息が無ければ渡すことは能きぬと、斯う云ふでござります、それで私、夜を日に稼いで利息の金を作らうと覺悟して、今歸つたのでござりまするが、然し家も田地もお父様には替えられませぬ、貫四郎が二兩の金を受けなんだは、この金でお父様の御病氣を治くさせよとある、天道様のお配劑と察しられます、お錢は天下の寶、人の命は家の寶、身の寶、脊に腹は替えられませぬ、これで人參買ふて參ります」

「お、爾うか、人の無慈悲も、用に立つことがある、それでは一走りに行つてたもるか」

「小田原のお城下まで——夜中までには歸ります、その間御介抱をお頼み申します」

金次郎は座を立たんとす、その様子を聞きやしつる、利右衛門は力なき手を振り動かして

「それは爲らぬ、待つてたもく」

「何故お止めなされるのでござります、とお由は眉を懸めながら「金次郎は少しも早くあなたのお苦しみが助け申したいと云ふて居ります」

「それでも爲らぬ、その二兩は私の金ぢやない、お醫者様のお情と、さうして御先祖のお心とが籠つてある、大切に納うて置け」

「お醫者様のお慈悲も、つまりはお父様を助けたい爲めでござります」と金次郎はおろくして

「私にお任せなされませ、私悪いやうには致しませぬ」
云ふ中に又苦痛來る、宛ら潮の一たん退きて、又寄せ來る如く、瘦せ窶れ

る、金次郎は茫然として

「あア何んとしたもの、このお聲を後にするは、此上もなき不孝と思へど、良きお薬買ひ求めて、寸時も早く御助け申し上げれば、それで不孝の罪は消ゆる、お父様、恕して下さりませ、あなた御苦痛を後に見て、私小田原へ参りませす」

暗深き大地にべたりと坐つて、涙の中に合掌する、障子に映るは母がおろくと父の脊を撫でたまふお姿なり、二人の弟が小さき胸に父の病苦を氣遣ひて、彼方此方と迷ひ歩く哀れの影なり

「神様、神様」と金次郎は合掌したるまゝ、四方を伏し拜み「私の歸るまでお父様をお頼み申します、どうぞお父様のお命をお守り下さりませ」

合掌せし手を解くと共に、耳を塞いで逸散に駆け出しぬ
されど天はこの孝行の兒を憐れみ給はざりき、三里の路を一晌半に駆け、亥の刻前に歸り歸りたる金次郎は遂に父の死目にも逢はざりき、人參、茯苓、麝香、犀角と、あらゆる高價の薬を懐にして歸りつも、それを服ますべき父の



唇は石の如く硬かりき、母と二人の弟とは父の空しき亡骸に纏ひつきて、詞はなく潛々と泣き入りぬ

「お父様、お父様」と金次郎は腸を絞る如き聲にて「残念でござります、このお薬が間に合はぬとは、誠に残念でござります」

「今は用なき薬袋を、父の枕邊に投げ出して、一時は涙も出でざりき、一時は我と人とを辨へ得ざりき、神も佛も頼み難き世の季を觀じて、兩手を又みたるばかりなりき」

利右衛門は金次郎が小田原へ出發すると間もなく、變來りて回らぬ旅へ赴きしとなりき、お醫者様は深切に御見舞ひも給はりしが、その時は早や薬も咽喉へ通らざりき、誠に定命ならん、嘆くとも返るべき事ならねば、深く思ひ諦めて、懇に後世を弔ひ奉る外あるまじ、とお由は語る

父の心を残したる二兩の金には、薬餌を調ふる爲めに手を付けつ、今は一兩と外に小錢を残すのみ

「お父様勘忍して下さりませ、こんな事なら薬買ひに參るのではござりませ

ぬ、私が悪うござりました、この残りのお金をお葬式の費へに致しまする、それもお聞き済み下さりませ、お父様、お父様」と胸の上に手を掛けて、「もう石のやうにならせられた、然し英霊はござりませう、私の云ふことを聞かせられて下さりませ」

枕頭に燻く線香の烟は、利右衛門の魂を返すが如く、金次郎の前へくと靡きぬ

第三章

(一)

利右衛門の主治醫は名を松崎道齋(假名)と云ひき、名醫と云ふにはあらねど、慈悲善根に富みたれば、近郷近在にも病家ありて、その玄關は繁昌しき今日しも隣村に病人ありて、その見舞に行きたれば、駕に乗りて暮れ近き野道を歸り来る、秋も早や盡さんとして、路傍に鳴く蟋蟀の聲も、露に濕りて憐れに聞えぬ

「先生様、お願いござります」
突然刈り捨てたる稻束の蔭より出て、斯う叫びたる者ありき、駕夫は立ち止りて

「誰ぞや」と前棒が云ふ、後棒は宵暗にすかして

「キ印ぢやないか、え、喫驚した、汝キ印ぢやな」

キ印は金次郎の綽名なりき、金次郎の頭字の「キ」と、彼の行爲の熱烈にして衆と異なる所多きとに由つて、土地の人はキ印と綽名するなりき

「松崎の先生様にお願ひござります」

「え、何を云ふ、先生様お急ぎぢや、キ印の相手になつて在らつしやる事は能きぬわ」

「私は無心者ではござりませぬ、先生様にお願ひござります」

「面倒な奴ぢや、其處退け」と後棒が大喝する

「退かぬと、足蹴に掛けるぞよ」と前棒は威丈高に云ふ

「これ」と駕の戸を颯と開けて、蒼白く瘦せたる顔を出すは道齋なりき

「キ印とはそなたか」

「いえ」と路傍に手を突いて「金次郎でござります」

「真に利右衛門の御子息ぢや、聞けばまづ葬禮も済んだと云ふ、さぞ力落しであらうが、これも天命ぢや、諦めさつしやい」

「有難うござります、父も呉々ゝあなた様御厄介に爲りましたが、遂に冥途へ旅立を致しました」

「何んと申さうやうもない、母上に變ることはないか」

「母も弟もみな健康でござります」

「それは重畳ぢや」と道齋は力のある聲で云つて「さて今聞いて居れば、私に願ひがあると云ふた、何事ぢやの」

「お容しを願はねば爲りませぬ、私は済まぬことを致しました」

「済まぬ事とは、どうなされたな」

「先生様お情でお恵み下された二兩のお金、彼を葬式の入用に使ふてござります」

「それならば詫びには及ばぬ、あれは私が進めたではなく、利右衛門どの田地を賣られた金子と云ふ」

「先生様へお樂禮が致したさに、傳奈の田地を賣つてござります、なれど先生様お詞には、それで田地を買ひ戻せと……」

「爾うは云ふたが、なにさ、利右衛門殿病死の折柄、葬禮の入費にお使ひなされて仔細ない、左様なこと、わざゝお断りにも及ばぬことぢやよ」

「ではござりまするが、第一父の志でもござりませぬ、それで私は先生様へ暫時の御猶豫をお願ひするのでござります、此處で二三年も日が経てば、その中にはきつと出精して、先生様の御厚恩に報いをする、それまでは私へお貸しなされて下さりませ、願ひでござります」

「利右衛門どの、子ほどあつて、そなたもお堅いのう」

「お慈悲のお金を空に使ひまして、先生様へ合す顔もござりませぬ、それで今日はお断りかたゝお屋敷へ出たでござりまするが、御病家へお越しと聞き、此處にお歸りを待ち受けたでござります」

道齋は深く金次郎の真心に感して、はら／＼と落つる涙を、暮れ行く秋の夕風に吹かれながら

「さて／＼感心な心掛け、生ささが思ひ遣らるゝ、斯ほどの少年を、キ印など怪しからぬことを申す」

「先生はまだ御存じないのでござりまするな」と後棒は掌に受けた烟草の吹殻を廻しながら「此奴のキ印を知らぬ者は村中に一人もござりませぬ」

「又左様なことを云ふ、愈よ怪しからぬ」

「こんな奴の事は何んと云ふても仔細ござりませぬ、先生も御存じの岡部善右衛門様、あの若旦那の處へ寺子屋のお師匠様がお越しなされます」

「その事は聞いて居る、夫が何うした」

「處があなた此のキ印め、自分の家が貧乏で、寺子屋へ行くことが能きかぬる、物の本一冊教はる人もない、然も高慢で時々青標紙をひねくります」

「はて、愈よ感心ぢや、金次郎どの學問の志があると見ゆるの」

「まアお聞きなされませ、そのお師匠様が善右衛門様へ御出で、御子息へ青標紙の御講釋爲さるを、このキ印め、戸の外から竊み聞きをして居りますぢや」

「貧窮なれば是非もない、良い師匠を取つて遣つても、標紙開けることさへせぬ少年の多い世に、他の講義を竊み聞きしやうとは、今時に珍らしい心掛け、左様な御仁を悪口しては濟まぬ、お身達も一生を怨昇で暮らすのが能くもあるまい、ちと金次郎どのを見習へ」

「阿呆らしうもない、こんな者を見習ふて何うなりませうぞ、それも神妙に聞いて居ることか、此間もお前様お師匠様が御講釋なされて居るのを障子の外から聞いて居て、それは間違つて居ります、と大聲で怒鳴つたさうにござります」

「はて、これや言語同断ぢや」

「でござりませうがな、ぢやに由て村の者からキ印など、好い綽名を付けら

れるのでござります」

「成るほどこれはちと宜しくない、金次郎どの左様な事がござるかな」

「いかにもござりました、然し私は無法にお師匠様御講釋の邪魔をしたのでござりませぬ、前の日に被仰つたこと、その日御講釋なされた事と、間違ひがあるやうに思ひましたゆゑ、思はず知らず聲を出したのでござります」

「爾う聞けば無理もない、それではお前、師匠の講釋が解るぢやの」

「十分には解りませいでも、道理に二つは無い筈でござります」

「いかにも左様、然し師匠は立腹致したであらうのう」

「いや、御立腹はござりませぬ、私斯様々と申し上げましたら、いかさまお前の云ふ通りぢや、負ふた子に淺瀬を教へられるとは此事、以來は音讀をお前に授けて理義はお前から聞くことにしやうのう、と却つてお歡ひでござりました」

「これは面白い、その師匠も中々の人物ぢや、これから私の處へもござらッせ、學問を家業には致さぬが、孔孟の道は多少心得てゐる、又茶話でも致す

にの

「有難うござります」

「是非ござらッせ、夜分は閑ぢや、お待ち申すぞ」

「先生、お止めなさりませ、こんなキ印行きかけたら、煩厭いほど参りますぞ」

「お前達の知つたことではない、さ、急いで遣れ」

「それでは唯今のお願ひ、お聞き入れ下さりまするな」

「心配さつしやるな、少しも懸念の要らぬことぢや」

「有難うござります、それで私も安心して歸られます」と云ひ、懐中から紙に包んだ物を出して、「どうぞこれをお納め下さりませ」

「はて、それは何ぢやな」

「此處に使ひ残りの金子が一兩あるのでござります」

「ほう」と道齋は閉めかけた窓の窓から顔を見せて「その金を何うなつしやる」

「あなたへお返し申すのでござります」

「私へ返すとは」と不審さうに「私は此方に金貸した覚えはないが喃」

(三)

金次郎は兩手に金包みを捧げたまゝ、進み出て

「これはお慈悲でお貸し下された二兩の中の半分でござります、その中の一兩は父上の人參代、それから葬式の入費萬端、據ない事に使ひ果いて、此處に一兩だけ残つたのでござります、これを私の手にお預り申して、萬々一の間違ひでもあつた時は、父上の御位牌にも濟ませぬ、私の心にも濟ませぬ、残る一兩は私が骨身を碎いて、一二年の中になつとお返し申します、どうぞこれだけお納めなされて下さりませ」と真心籠めて云ひ出づる

夕陽は黄金の色を刈田の上に敷き詰めて、肌寒き夕風、そよ／＼と涙を吹く、道齋は金次郎の顔を沈と見詰めて

「そなたは何んと云ふ感心な者ぢや、村の手合はキ印など、悪口するか知らぬが、私の目からは神様のカ印に見える、神の手からお金貰ふては私の心が濟まぬほどにな、その金で利右衛門殿の間ひ弔ひをして遣らッしやれ、見れば九月の末と云ふに、まだ單衣一枚で居る様子ぢや、肝腎のお前がそれでは、二人の弟もどうせ寒い風俗をして居やらう、私はお前の藥禮を受けずとも、斯うして温い物をたんと着て居る、貰ふたも同然ぢや、其儘持つて歸らつしや」

「いえ」と力のある聲で「それでは濟ませぬ、先生様へ義理を缺いて、衣服を着るのが望みではござりませぬ、不義理のお金で布子作つて、それが温い理由はござりませぬ、私の衣服や弟の布子は、私の手で稼ぎ出して、買へる時に買ふて着ます、このお金はお藥禮にさし上げるつもりで、父上がお調へなされたのでござります、どうぞお受け下さりませ」

「あアお前はな」と道齋は感心の眼を睜つて

「さほどに云ふなら、その一兩を貫四郎へ預けさつしやい、すれば後の一兩で一反の上田が買ひ戻される」

「中々、それを預つて呉れるやうな貫四郎ではござりませぬ、二兩のお金の

耳を揃へて買ひ戻しに參つてさへ、利息を付けよと云ふほどの人間でござります、一兩のお金を預る筈はござりませぬ」

「貫四郎、左様なことを云ふか」

「假し預つて呉れた處が、それは何んの益にも立ちませぬ」

「はて人情を知らぬ奴ぢや」

「でござりまするゆゑ、このお金はあなた様のお手へお受取りをお願い申します」と云ふ聲に力を籠めて、「是非々々、どうわつても、お受取りを願はねば爲りませぬ」

金次郎は金包みを剽の窓へさし付けて、容易に動く様もなかりき

「それほどに云はしやるなら」と道齋は僅に點頭き「一まづ預つて置かうか」

「爾う爲されて下さりませ、それで私も心が晴々致します」

道齋は金次郎の手より彼の一封を受け取つて、深く内懐へ容めつゝ

「預つては置くが、貰ひは致さぬぞ、入用の時があつたら何時でもござらッ

せらよ」

「はい、有難うござります、それで父も草葉の蔭で歡ぶ事と存じられます」

「私はお前の真心を胸に抱いて、これから戀しう宅へ歸る、母ぢやにも良う云ふてたもれ、願ふことではないが、もし小さいのが風邪でも冒かれたら、すぐ薬取りにござつせいと」

「有難うござります」

「少しも遠慮は要らぬ、私はお前のやうな律義な人を病家に持つを、此上もなく歡びます」

道齋は尙二言三言慰めて、剽の戸をはたと鎖す、剽身は歩み出す、日は暮れんとしてまだ暮れず、夕陽の名残り、柿畑の上に春く

金次郎は道齋の剽の半町ほども遠かりたる時、ふツと顔を擡げたるが、その前にすツくと立ちし大男あり

「汝キ印ぢやな」

金次郎が大地より身を起さんとする時、頭より浴びせかけて間ひ掛けしは賈四郎なりき、金次郎は恐れたる様もなく、傲然として

「金次郎でござります」

「この寒いのに、こんな處で何をして居た」

「お醫者様へお金を返して居りました」

「は、は、」と膏切つた顔を夕陽に照して「人間らしいことを云ふの、金を返すのは正面の者のすることぢや、秋も暮れて冬の寒さが目の前に迫つて居るに、此方まだ單衣を着て居るでないか」

「單衣を着るが耻辱ではござりませぬ、義理を缺くが耻辱でござります」

「寒うはないか」

「心に誠があれば、寒暑とも凌がれます、世に誠を焼く火は無いと云ふこと

でござります

「此奴生意氣なことを云ふ、そんな事誰に教はつた」

「天地の間に生を得た者、天地の道理を知らぬ筈はござりませぬ、今西の山へお沈み爲さるを、天道様とは誰も知つて居ります」

「キ印は伶俐いものぢや、然し何ほ伶俐うても、金が無うては役に立たぬぞ、金の無いのは首の無いにも劣ると云ふが、此方首がついて居るか」

「樹には花が咲くと極つて居ります、花には實が生ると定つて居ります」

「それで此方には首があるのか、は、は、は、キ印は何時の間謎掛けるのを覺えたな」

「道理に二つはござりませぬ、自然は神様の教へでござります」

夕暮れの風蕭々と吹く間に立ちて、金次郎は悪びれたる態度もなく、天地自然の道を説くなりき、彼は貧家に成長して、細絢ひ、草鞋作る外に、何んの教へを受けたる事もなければ、天稟の美質は自然に現はれて、常理湧然と胸に湧き来るなりき、道齋が慈悲の前に土下座して、一兩の金の猶豫を乞ひ

し身も、この黄金魔の前に立ちては、宛ら巨巖の動ぜざるが如く儼然として、
一步も譲らず天地の理を説くなりき

旃檀は嫩葉より香ばし、報徳の大業を成し遂げし偉人の幼時は、不義の富
を見る土芥の如くなりき、慈悲恩誼の前には頭を下げて、不義黄金には目
もくれざりき

「それほど道理を知つた者が、よう先祖の上田を手放したな、利息の金も付
けず買ひ戻しに参つたな、聞けば此方は善右衛門様の障子の外から、お師匠
様の講釋を立ち聞きするげな、粥も吸れぬ口に聖人の教へを説いて、それで
腹が膨れるぢやの」

「朝に道を聞けば、夕に死すとも可なりとござりまする、草は延びるがまゝ、
に延びて枯れます、なれど人間と生れた甲斐には、人間らしう成人したいも
のでござります」

「何んぼ口賢う云ふても、爲ることが伴いでは何んにも爲らぬぞよ、口で
立派らしいことを云ふても、一兩の金に土下座をして、救醫者を拜むやうで

は人が承知せぬぞよ、此方は天地自然の道理ぢやなど、豪さうに云ふが、こ
の寒天に單衣一枚着て慄ふのが天地の道理か、先祖の田地を賣り飛ばして、
母子の命つなぐのが自然の道理か、そんな事を云ふて歩くよりは、ちと私の
家へ手傳ひに來い、一月働けば十文や二十文は賃を遣る、一年が間口賢う理
屈云ふより、一月働いて二十文の得を取るが大事ぢや、これ口よりは手を働
かせ、理屈よりは金を見せる、何んぢやその姿は……さうして村中をのさ
ばり歩いて、大口を開いて居たら、この村の草分、二宮の先祖も嬉しかる、
キ印の業晒し、乃公の爪でも煎じて飲みよ」

貫四郎は口を極めて悪口しぬ、然もその悪口に道理ありき、罵詈の底に光
りありき

金次郎は豁然として悟る

(五)

いかにも貫四郎の云ふが如く、口に聖賢の道を説くとも、身に聖賢の教へ

を行はずば、遂に何んの利益もなからん、今や道義地に委し、人情の類廢此處に極る、人は皆な利を争ふに義理と人情とを思はず、肉身の親を捨て、も黄金の前に跪く、道の行はれざる今日の如く甚しきはなかるべし、才ありといへどもその力なき時は行はれず、才と力と合せ持ちても、其徳なければ行はるゝ時あるまじく、徳ありても位なければ行はれぬ例原より多し、誠は天の道なり、天の道を行ふは人の務めなり、これを大きく國家の事に行はんとするは、大山を挾んで北海を超ゆるにも優りて難かるべけれど、之を小事に用ゆれば行はれざる事殆んど無からん、茄子は茄子の木に生る、これ天の誠なり、されど肥を遣り、良土を培ひ、天の道を助けて多くの實を取るやうにするは人の務めなり、將た天の誠を行ふなり、馬は良く駈け、良く耕す、これ天の誠なれど、秣を與へ伺ひ馴らして、具に天職を盡さず、これ人の務めなり、茄子の實十顆を見るが天分と假りに定め、それを十五顆二十顆三十顆の多くを收得するは、人の力、天の誠を扶け爲すなり、馬は一貫目の荷に堪ゆるを天分と假りに定め、二貫目三貫目五貫目の重きに堪へさすを得ば、

人の力、天の誠を行ふなり、我家今は微祿して、物の道理だも辨へぬ百姓の足に、父祖の遺體を蹴らるゝに至る、返すくも口惜し、なれどこは家を天に任せたる罪なり、いかに上田も天の爲すまゝに任せ置けば、二三年の間には茫々たる草原となり終らん、それを良き田、良き畑として人間の用に供するには、鉄も入れ、鋤も入れ、多くの肥料を與へねばならぬと同じく、家も天に任せ置けば、やがて朽ちて原の草原となり終らん、人間は一日に一升の利を得て、父母兄弟を養ふを天分とし、その上に又躬行實踐して、假し一足の草履、一尺の細にても絢は、それだけ人の務めを行ふなり、茄子を作るは百姓すべし、馬を肥すは馬士能くすべし、家を齊へ、産を起し、父祖の家名を再興して、今日の耻辱を雪ぐ事、われの外に誰か爲さん

貫四郎の罵詈雑言は、我の爲めに良き教訓なりき、今日はいかなる吉日ぞ、一面に道齋先生の情ある教訓を聞き、一面に貫四郎が光りある罵詈を聞く、われの心は決す、われは聖賢の教へを實踐躬行して、誠の道を行ふべく、至誠の通ずる處、神の納受なき筈無し、今より飯泉村の觀世音に參詣してこの

希望の成就を祈らん、この一念の成就を誓はん
「は、は、は」と貫四郎は金次郎が次第に暗く藪り行く夕暮の野道に立ちて深く何事かを考え居れるを嘲り笑ひ「爪が欲しくば何時でも遣る、乃公の爪は道齋の匙よりよく利くぞ、は、は、は、その様は何んぢや、宛然で寒山十得の繪が脱け出したやうぢやぞよ」

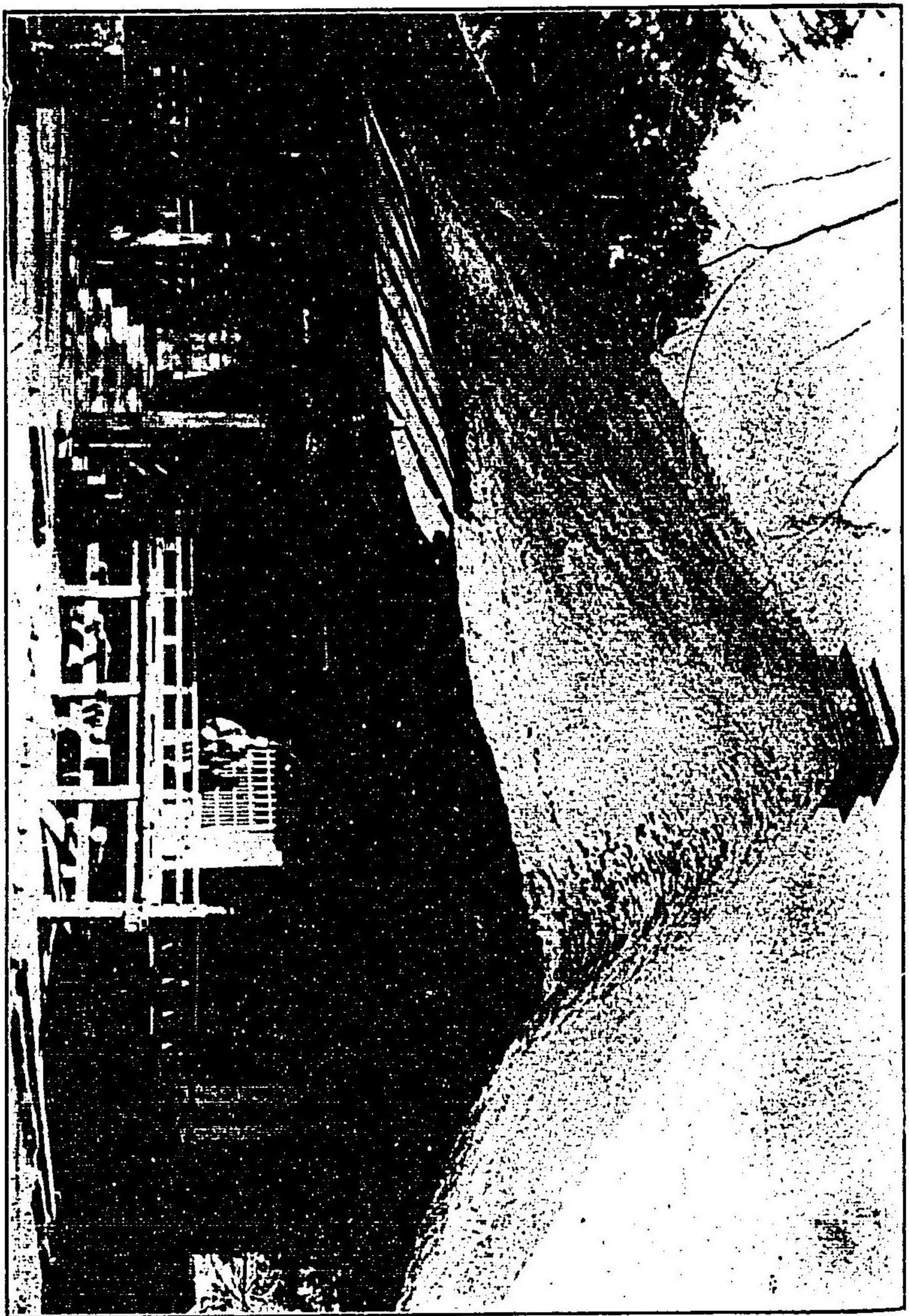
「有難うござります」と金次郎は思はずも禮を云ふ

「は、は、は、愈よキ印ぢや、何處の國にも、他に頭を打擲せられて禮を云ふ阿呆もないものぢや、おのれ今乃公の云つた事を何んと聞いたな」

「有難う聞きました、何時か一度はこのお禮を致さねばなりません」

金次郎は斯く云ひ捨て、後をも見ず隣村へ急ぎぬ、飯泉村までは小半里もあらん、其處の觀世音はこの邊りに靈驗の著きをもて聞こえたる道場なり貫四郎は後を見送つて

「やれはれ、人らしうも無い奴ぢや、悪口せられて禮を云ふ、利右衛門もよい伴を持つて草葉の蔭から歎んで居るであらうぞ」



飯泉觀音堂

神の心を心とせる金次郎は南に去り、黄金をもて飾る恐ろしき魔は、悠然として北に去る、後には身に沁む夜の風蕭々たり

(六)

観音堂に冬の夜は深けて、天には星の光り淡く、後の森に梟の鳴く聲物凄く聞こえて、浮世の暗を照らすか如き佛燈の火、幽かに蓮華の間を漏るゝ、前の程よりその拜殿の上に坐りて、観音經を讀誦するは、年老ひたる一人の行脚僧なりき、聲も朗かに

「佛と因有り、佛と縁有り、佛法僧縁、常に我淨きを樂ひ、朝に觀世音を念じ、暮に觀世音を念ずれば、念々心に從つて起り、念々心を離れずと……」
誦し終りて、幾度か南無觀世音、更に幾度か唱名、漸くに身を起さんとす
る時

「ちよと物をお尋ね申します」

突然と聲を掛けて、賽錢箱の蔭より現はれたる少年あり、老僧は驚きたる

様も見せず

「誰ぞやな」

「私でござります」と言かに進み出でたるは、この夜寒に徹れたる單衣一枚を纏へる金次郎なりき

彼は心の覺悟を誓ひ、心の大願成就を祈るべく、甲夜のほどより此處へ來りて、大慈大悲の御前に、赤き誠を披瀝し居たるなりき

「私に……」と老僧は沈着いて「何を聞かうと云はる、喃」

「外ではござりませぬ、今お読みなされたは、何んの御經でござります」

「御前さん知らしやらぬか、今のは觀音經ぢや」

「觀音經でござりまするか、はて」と不審の眉を顰めて「觀音經なら今まで幾度も聞いて居りますが、唯今のお經とは異つて居るやうでござります」

金次郎の聲は人並優れて大きかりき、年の割にも、春の割にも、優れて高く大きかりき、その太き聲、宛ら鐘の如く佛堂の中に鳴り響く、夜の鳥の聲、夜の風の聲、遠くに鳴る水の音、何れも皆金次郎の聲に打消されぬはあらざ

りき

「お前の聞いたのは吳音であらう、今の世はいかな御經も昔な吳音で讀誦する、それを私は國音で讀んだのぢや」

「道理でよく理解されます、お蔭で有難い教へを聞くことが得ました」

「お前は何處の人ぢや」

「栢山村の者でござります」

「何んと云ふの」

「金次郎と申します」と云ひながら錢二百文を取り出して「これは眞の寸志でござります、どうかお納めを願ひます」

「これは、お若いにも似ぬ御奇特なことぢや、お布施下さるか」

「誠に輕少、お恥かしうござります」

「お布施の高は取らぬ、私はその志の廣大なのお受け申す」

「御無理な願ひでござりまするが、私から一度今の御經が承はりたうござります」

「諾し、御所望とありや誦んで進ぜる」

「どうぞお願い申しまする」

老僧は再び經文を押し開きぬ、幽かに螢の如く照る佛火は、鐵網の扉を漏れて、その清き光りを経卷の上に投げぬ、老僧の經讀む聲は、宛ら秋の風の木の葉を渡る如く清かりき、宛ら谿川の水の岩間を奔る如く静かなりき

天地寂寞として、物の響きもなき間に、金次郎は唯黙して聞く

やがて老僧はその一卷を読み終りて、卒然と身を起したるが、金次郎には詞も掛けず、飄然として之く處も知らず去りき

金次郎の胸の底は暗き雲始めて開けて、その間より月の光りを見たる如く爽然たりき

(七)

天は澄みて木枯の音淋しく、星は輝きて、清き光りを金次郎の上に投げぬ、金次郎は飯泉村觀音堂を出で、夜の風寒き野の道を、稻山村の家路へと急

ぐなりき

彼の胸には今聞き得たる觀音經の意味籠りぬ、慈悲と云ひ、功德と云ひ、佛と云ひ、因縁と云ふ、これ等皆な至誠の片側ならぬはなきを感じぬ、日は誠の光りに輝き、月は誠の陰に澄み、草木は誠の色に繁り、河水は誠の波に漾ふ、凡そ世の中の森羅萬象、一として誠の一字に漏るゝはなし、至誠の徹する處、いかな難解の文字も解け、いかな混雜の事情も分明す、神も佛も皆な至誠の表現、至誠をもて世に立たば、人間の力に能ふまじき大事も遂げらるゝ、誠なるかな、誠なるかな、われはこの誠の道を守りて、父祖の名を高く揚げん、誠には敵なし、假しありとするも何物かよく對峙し得ん 彼はこの寒き夜の風に、敵れたる單衣一枚を纏へるのみなりき、初霜白き野の道を履むに、千切れたる草履を穿ちたるのみなりき、されど絶えて寒しとは思はざりき、彼の身體には至誠の氣満ちぬ、至誠の力は夜の寒さをも近けざりき、霜露の冷きをも弾き返しき

「あア、こゝは善榮寺ぢや」

金次郎は何時の間にか栢山の村内に來り居たりき、寒き天を雁の鳴き渡るに驚きて、不圖顔を擡げ見れば、其處に堂角蕭然と立ちて、夜も鎖さぬ門の中に、佛燈の影明滅たり、父はこの寺の背後に高き墓地の中に眠りたまふなり、參詣せでは協はし、家名再興を思ひ立ちて、飯泉觀音に誓願せるわれは、父の靈魂に對ひても、又この心の大覺悟を申さでは協はし

「お父様、又お尋ね申します。」

金次郎は直ちに門に入り、直ちに墓地に駈け上りて、父の墓墳の前に立ちぬ、卒塔婆は露に濡りて白く、花筒は霜に凍りて淋し、燒き捨てたる線香の端に星は宿り、昨日手向けたる寒菊の唇に風は渡る、金次郎は幾度か合掌して

「お父様、お淋しうござりませうなア、私は今夜深く思ひ立つことわつて、飯泉村の觀音様に起誓をかけてござります、家名再興致すまでは、決して綿の入つたものを着ませぬ、決して身の榮耀の爲めに身體休めることは致しませぬ、道齋様には一兩のお借りござりまするが、それもきつとお返し申しませぬ。」

する、其四郎に賣つた田地も、近い内に置ひ戻してお目にかけます、二人の弟はお父様の御遺體、私の及ぶだけはお世話を致しまするお母様は天にも地にも掛け替へのない親、身の肉を殺いでも御不自由はさせませぬ、お父様はお近れ遊ばしても、魂魄はまだ止つてお在でござりませう、どうぞ長いお目に私の爲る事を御覽なされて下さりませ、私は今夜旅の御出家様に、有難い觀音經を聞かせて戴いて、心に覺悟したことござりまする、お父様、お父様、私はこれから……」

彼は宛ら生ける人に云ふが如く、心の希望を語るなりき、亡骸はこの墓の中に埋められたれど、父の靈魂は尙卒塔婆の上に止りて在すと定めて、利右衛門世にある時に變りなく、真心籠めて仕うるなりき

「此方金次郎どのでないか」

「思ひ掛けもなく聲を掛くる人ありき」

「おう、方丈様でござりまするか」と金次郎は振り向いて「夜は殊の外冷え

まする」

「そなた夜深けに、又参詣しやるぢやの」

「恰ど御門前を通りましたので、お父様をお尋ね申したのでござります」

「さうか、よく尋ねて上げさつしやる、利右衛門殿はお前が爾うして尋ねて上げさつしやるので、どれほど歎んで居らしやるかも知れぬ、然しこの夜深けに何處へお行きなされたな」

「飯泉村の観音様へ参詣してござります」

「それはよう参らしやつた、神佛の参詣には必ず誠の心が伴る、誠は佛の御本願ぢや、そなた信心がやがて利右衛門殿の冥福に爲りますぞ」

「有難うござりまする」と金次郎は頭を垂げて「方丈様は遅うまでお目覺めでござりましたな」

「年を老ると夜が寐られいで、まぢく」と起きて居ると、この墓地で人の聲が聞こえたのぢや、そなたとは知らず、盗賊でも来たのではないかと思ふて、これ見さつしやれ、これを持って出て来たのぢや」

方丈の右の手には朱塗せる鐵如意握られぬ

「この様な墓地にも、盗む物があると見えするな」

(八)

「金になる物は何んでも盗むよ」と和尚はてか／＼と光る頭を振りて、石碑も金になるからの」

「恐ろしい世の中でござりまするな」と金次郎は今更の如く驚き「物を盗む間で、何故稼ぎを致さぬでござりませうな」

「其處が人心ぢや、其處が淺ましい凡夫の悲しさぢや」

「謠にも稼ぐに追ひつく貧乏は無いと申します、天災、病氣、これは止むを得ぬでござりまするが、その天災も用心一つで免れることが能きぬとは限りませぬ」

「ほ、これは不思議、人間の病氣や災厄は、用意次第で免れることも能きやうが、天變地異ばかりは人間の力で何うすることも能きぬ、それを免れる道

あらうかの」

「天變地異を免れることは能きませぬ、けれどそれの補ひさへ付けば、變のないも同然ではござりませぬか、古い譬へに、三年の財蓄なければ國に非ずと申すこととござりまする、國ばかりではない、家、人、みなこの心得なうては協ひませぬ、天變を免れる工夫は、常からその補ひの道を考えて置くでござりまする」

「こりや好いことを云はれた、成るほど補ひが付けば變はない、補ひのない變が大變ぢや、此方理屈が良く解るの」

「誠の道は唯一筋と心得ます」

「大きに爾うぢや、神と云ひ、佛と云ひ、儒と云ふも、詮ずる處は同じ道ぢや、そなた何時の間にもそのやうな事覚えさつしやつたな」

「人と生れて道を歩ませぬものはござりませぬ、道のない山々を駆け登るは、苦しう息切れのするものでござりまする」

「それを智慧のない連中は、好んで險阻を行きたがる、お蔭でこの如意が放

せぬのぢやよ」と和尚は笑ひ顔なりき

「私も家は滅び、父には死なれる、険しい山を駆け登つて、金の山でも見付けやうかと思ひましたが、道齋先生の御教訓、貫四郎殿の悪口、續いて飯泉村の観音堂で、旅の御出家に観音經を聞かせてお貰ひ申して、始めて無明の夢が覺めたでござりまする、やはり人間の歩む道は誠の道の外とござりませぬな」

「は、これは意外、そなた観音經が解るぢやな」

「お蔭様で廣大無量の御功德を會得してござります」

「ふ、そなた正しう……」と和尚は顔の色を變えるまでも驚いて「観音經の理義を會得したぢやな」

「佛のお意も、人を濟ひ、人の心を安んずるを第一の旨となさるゝを、始めて知つてござりまする」

金次郎の答へは宛ら響きの物に應ずる如くなりき、和尚は愈よ驚いて「私はこれ此年まで、観音經を續誦すること、幾千百回と數限りもないが、

それでもまだ十分に理義を解しかねてある、それをそなた若年の耳に一度聞いて、おぼろげにも理義を會得したとは、これや人間術とも思はれぬ、梅は自然に香り、菊は自然に匂ふ、そなたの才智は天から稟けてある、まこと菩薩の再来とも云ふべきぢや、私は今日限りこの寺を退く、そなた相續しては下さるまいかな」

「それは爲りませぬ、私は出家は致しませぬ」

「此處に利右衛門殿の卒塔婆もある、私は利右衛門殿の前で勤める、どうぢや、出家して諸人濟度の道を行ふては下さらぬか」

「御免下さりませ、私は外に大きい望み持ちてござります」

「大きい望み、そりや何んぢや」

「祖先の家を再興して、御代々の靈位を安んじやうと思ふでござります」

「其事は三郎左衛門殿でも能ざる、他の花も同じやうな香りがあるとは極らぬ、これは是非聞かせられ」

「平に御免なされませ、私にはまだ母親がござります、私の外には草鞋作る

者もござりませぬ、私の他には粥の料得ける者もござりませぬ」

「ではやつぱり百姓をさつしやるかの」

「農は國の基、誠は身を立つる基、私は誠をもて人の心を安んじやうと思ひます、出家は致しませいで、諸人濟度の理りを説く心でござります」

「さて惜しいもの、」

「方丈様はお寺にござつて道をお説きなされませ、私は在家に居て道を行ひます、僧と俗とは異りませしても、その心は同一でござります」

「栢山に大い樹が生きた、私はもう何も云はぬ、母ぢやが待ちかねて居やう、夜も深けてある、疾う歸らしめ」

「さらばお別れ申します」と金次郎は又父の墳墓の前に跪いて「お父様又明日お尋ね申します」

(九)

「甚う遅うなつた、何處に居やつたの」

お由はまだ寐もやらず、幽かに照る佛燈の前に座して、海藻の如くなりし襦袢の衣服を綴り居たりき

「今日はちと思ひ立つことがござりましてな、飯泉村の観音様へ参詣してござります」

金次郎は今歸りて母の前に端座しぬ、彼の清く輝ける目には希望の光り満ち、彼の堅く結びたる唇には決心の色現はれき

「よく参りやつた、寒うは無いか」

「何んともござりませぬ、歸りには善榮寺でお父様お尋ね申してござります」
「善榮寺様へも参詣して來やつたのぢやの」

「それで遅うなつて辯解ござりませぬ」と云ひながら母の膝下近う敷れたる夜着打ち被ぎて伏し居れる三郎左衛門を見遣りながら「三郎左衛門は寐たと見えませぬ」

「そなた歸りを待つと云ふて、今のさきまで起きて居たが、餘り遅さに堪えかねて寐たわいの

「寒くはござりませぬかな、兎朶でも煙べて遣りますかな」

「何んの寒いことあらうぞ、三郎左衛門は綿の入つた夜着被て居るわよ」とお由は涙聲で云つたが「金次郎、私は此方に相談したいことがある」

「お母様何事でござりまするな」

「外ではないが、お父様お逝れ、後はこの通りの體裁で、残るは中田が一畝歩、下田が六畝二十八歩、都合七畝二十八歩の田地と、そなた、三郎左衛門富次郎の三人ぢや」

「お母様、御心配なされませぬ、私今にお心を安めるやうに致します」

「爾うではあらうがさし當る難儀は、明日からの粥の料ぢや、七畝二十八歩の田から母子四人の食ひ扶持は稷られぬ、そなたが身體を粉に碎いて、耕作に勤めた處が、一畝は中田、残るは下田、二俵の米は稷りかねる、其處で作兵衛様仰せには、脊に腹は替えられぬ、その田地賣り拂つて、子供に一枚の着物でもと……」

作兵衛は利右衛門の親友、お由の實父の従弟に當りて、常に當家に同情せ

る百姓なりき、金次郎は皆まで聞かず

「假へ少しの田地でも、それは御先祖の御記念でござります、成るべくならば人手に渡したう無いものでござります」

「さ、私もそれを思ふでの、作兵衛様へは吉いやうに云ふて置いたが、飢渴には替えられぬ、身の肉を殺ぐつもりで、田地賣つては何うあらうの」

「まア、待たせませ、お父様お近れなされてまだ間がない、七畝の田地を手放すには忍びませぬ」

「そなた爾う云やるなら、田地賣ることは止めても置かう、外にもう一つ相談があるのぢやよ」

「まだ御相談、それは何んでござります」

「此處に居るこの乳呑兒ぢや」と懐に抱きたるを腮にて示す。その上へはら落つるは熱湯の如き涙なり

「富次郎どうしたのでござります」

「どうもせぬが、私はこれを作兵衛様へ預けやうかと思ふのぢや」

「富次郎を……不憫なことでござりまするな」

「私も利右衛門殿困窮の後を引き受けて、女の手にか家の萬事を引き構えて行かうと云ふのぢや、一通りの事ではならぬ、そなたと三郎左衛門とはどうかして養ふても行く氣ぢやが、富次郎までは手が届かぬ、第一乳呑兒を抱いて居ては、一足の草鞋も沈着いて作られぬ、それでこれを作兵衛殿へ預けやうと覺悟したのでぢや」

「不憫なことでござります、私、三郎左衛門、富次郎、みな一つ幹に實つた豆でござります、富次郎の入用は私が夜仕事しても續けます、同じものなら兄弟三人、お父様の御位牌の前で成人させて下さりませ、願ひでござります」

「いや」とお由は決心の頭を掉つて「大事の子ぢやもの、捨てる藪を探りたうは思はぬが、富次郎を抱いて居ては、三人ながら飢に泣かせる、もう止めて下さるな、そのつもりで今日はたんと乳も呑ませた、夜更けてから氣の毒ぢやが、そなた富次郎を作兵衛様へ伴れて行つては呉れまいかの」

富次郎の顔は佛燈の火に映りて紅かりき、懐に抱かれながら、その身の頭に情無き運命の落ち來り居れりとも知らず、すやくと眠るあどけなき顔を見ては、石よりも堅き覺悟の兎もすれば動き來らんとするを、我子には見せじと一生懸命に齒を切ばる、金次郎は憮然たり、夜は次第に更け渡る

「のう金次郎、私の頼みを聞いて呉れまいかの、お前は晝間から方々を駆け歩いて、疲れても居やらうが、私の手づから子を捨てるには忍びぬ、此處にお父様もお在でぞや、御代々も在らせられる、寒くはあらうが作兵衛様お宅まで行つてたもれ、血を分けた子供ぢやもの、可愛うなうて何んとせう、なれど此子抱えて居ては家に取り身に取つて爲めにならぬ點もある、私が一生の願ひ聞いてたもれ」

お由は心強く富次郎の熟睡み居れるを懐より抱き取りて、詞も無く茫然と黙居たる金次郎の前へさし付けぬ、金次郎は恨めしげに母の顔を見たるのみ、富次郎を此方の手に抱き取らんとはせざりき、
「これほどに云ふを、此方聞いてはたもらぬぢやや嘯」

お由はや、立腹の様なりき、此上金次郎に返答なくば、自ら富次郎を掻き抱きて、作兵衛の家へ駈け付けん様なりき
金次郎は熟々思ひぬ

富次郎を他手に預くるは、身の肉を割くが如く悲しけれど、然も與うるにはあらで預くるなり、富次郎恙く成人、幸ひに心の望み協ひて、家名再興の時を得ば、再び家に呼び迎えて、母人、弟の笑顔を見る歡びもあらん、殊に遠くへ遣るにはあらず、殊に情知らぬ他人の手へ預くるにはあらず、軒こそ隔ちたれど同じ村、薄けれど遠縁、母人の此處まで深く決心したまふを、反古にせんは不孝、又母人の宣はる如く、富次郎を抱かせては却て母子三人の苦痛を増す事となる、別るゝは會ふの原、苦痛は歡樂の母ともならん、一たんの悲しみは深くとも、母様お詞に従ひて富次郎を作兵衛様御手に托し來らん、これ肉身の愛情を捨つるにあらずして捨ふなり

「何んの……何んのお詞に背くこと致しませうぞ、富次郎は不憫なれど家の幸福には替えられませぬ、今から富次郎を作兵衛様お宅まで伴れて行きませ

す

「それでは云ふことを聞いてたもるか、嬉しや肩の荷が下りるわいの」
身を切る如き悲しみを歎びたまふ母の心推量して、金次郎は又一入の涙な
りき

「つい一走りに参ります、富次郎、さ、私の手へ抱かる、ぢや」

金次郎は両手を出しぬ、お由は富次郎を金次郎の手へ渡さんとして、その
寐顔の上へ一平の熱を溢しぬ

「兄ぢやが抱いて、良い處へ連れて行かうとぢや」

富次郎は金次郎の手に抱かる、と共に、不圖目を覺まして「母さま〜」と
泣き出す、金次郎はそれを横抱きに起ち上りて

「泣くまい〜、好い處へ連れ行くぞ」

(十)

「もし作兵衛様」と金次郎は作兵衛の家の前に立ちて「お留守でござります

か喃、金次郎でござります」

ほと〜と戸を叩く、裡面には燈火幽かに照りて、夫婦の物語する聲清し
く聞こえぬ

「作兵衛様、まだお目覚めでござりまするか、金次郎でござります」

再びほと〜と戸を叩く、その聲妻の耳に入りたりと覺しく、起ち上りて
戸を押し開く、北山おろし寒く吹く、夜風は金次郎より前に入りて、作兵衛
の前に置かれし燈火軽く目叩きす

「ほ、寒い、ほ、寒やの」と妻は戦慄ひしつ、

「誰ぢや、金さんか」

「へえ私、夜更けてお氣の毒を致します」

「富さんを抱いてお在でぢやの可愛やばら〜と目を開いて……………この寒
さうな顔わいの」

「母様からお願ひしてござりますさうな、どうぞ此の厄介者をお世話なされ
て下さりませ」と金次郎は裡面へ入る、作兵衛は金次郎の家の如く貧しから

ず、又貫四郎の如く富みたるものにもあらず、中百姓の心豊かに真鍮の獅鬚
火鉢を抱いて、額に鉢を寄せながら、さろく〜と清き眼を配りつゝ、

「金次郎か、夜深けて御苦勞ぢや、此方も若いに苦勞をさつしやる」

「子供の中に父親と別れたほど、不幸なものとはござりませぬ」

「察する〜、利右衛門殿も案外早う死なれたの」

「貧が殺したのでござります、私は貧乏を不幸とは思ひませぬが、お父様は
正しう貧が殺したのでござります、貧乏ほど憎い奴はござりませぬ」

「利右衛門殿も善人が過ぎたのぢやの、氣の弱い善人は、兎もすると氣の強
い悪人の餌にされる、これも浮世の態度ぢやわの」

「母様から御無理願ふてあるさうでござります、何分お願い申します」

「諾し〜、富次郎の事は私が引き受ける、利右衛門殿のお子と思へば、爲
らぬ間からも世話の爲甲斐がある、これ〜」と作兵衛は妻を見返つて「そ
の子を抱いて遣らつしやれ」

「これよ富次郎よ」と金次郎は今さらの如く、その抱きたる幼児の顔を見て

「今夜から此處の叔母様に抱かれて寐るぢやぞよ、お母様の乳の様に甘い物
の出ぬのを悲しんではならぬぞよ、お前のお母様は私や三郎左衛門を養ふ爲
めに、お前を此處の叔母様にお預けなされるのぢやぞよ、お前はお母様のお側
を放れて、此處の叔母様の御厄介になる、不幸の様ではあるが此處の叔母様
は、お母様見たやうに貧乏では在らせられぬ、乳汁を呑む幸福はなくとも、
寒い目をする不幸はない、叔母様叔父様を眞の父上母様と思ふて、無理も云
ふぢや、悪戯もするぢや、物に隔つる心があつてはならぬ、遠慮してはなら
ぬ、不孝をしてはならぬ、今日別れるは明日會ふ原ぢや、私は蔭ながらお前
の無事を飯泉村の觀音様へお願いするぞ、さ、叔母様の處へ行け」

作兵衛の妻のおとわは兩手に富次郎を抱き取らんとしたれど、富次郎は唯
泣き入りて、金次郎の手に縋り付きぬ、幼き心にも兄弟の愛き別れを自ら精
神が知らするなりき

「氣疎いことや、私の手へは來ぬと云はるゝ」

「それも無理はござりませぬ、犬猫でも知らぬ人の膝に懐くことござりませ

ぬ、況して人の子、富次郎はもう物心が付いて居ります」

「それにしても其分では爲るまい、泣いて居ても聞はぬ、そなたの手へ抱き取るぢや」と作兵衛は指圖する

「何んとなう恐ろしい様にもござりまする」とおとわは幾度も躊躇せるが、やがて我手へ抱き取つて、好い子ぢやの、甘い菓子進ぜうの」

「母さま」と富次郎は廻らぬ舌に云ひながら、その愛らしく黒視勝の目に涙を持ちて、慌しく金次郎を見返りつゝ、「兄さま、兄さま」と、憐れなり

「私が居ては富次郎の心沈着きませぬ、叔父様叔母様どうぞお願ひ申しまする」

「おゝ、富次郎は引き受けた、お前は母御を大切にさつしやれや」

「天にも地にも替えられぬ、唯一人の母親でござります」と金次郎は又してもはより落つる熱湯の如き涙を拂つて「これでお暇致しまする」

「これ」と作兵衛は呼び止めて「肝腎のことを忘れて居た、明日からは

又酒匂川の土手普請ぢや、利右衛門殿死去の上は、そなた人夫に出ねば爲るまいぞよ」

「年々の事でござりまするな」と金次郎は驚きたる様もなく「彼の土手は私の仇でござりまする」

「はて不思議な事を云ふ、土堤が敵とは何うした理由ぢやの」

「彼の土堤が切れたばかりに、私の家の田地流されてござります、私の家が此やうに貧しうなつたも、皆な彼の土手のお蔭でござります」

「爾う云へば爾うぢや、年々の水損、酒匂川の水の底には、百姓の涙が沈んで居るぢやの」

「私は何うかして彼の土手が鐵壁にしたうござります、土手さへ切れねば栢山の百姓も、もう少しお金持ちになるでござります」

「それに今度は大破損、お上のお手元ばかりでは遣り切れいで、江戸將軍家からお助けもあると云ふ、近日御普請奉行が御檢分になる筈ぢや」

「すると江戸からお役人がお越しなさるでござりまするな」

「その事は今朝聞いた、何んでも今度は近年にない大普請と云ふに由つて、どうせ月日も長く掛らう、私どもはどうか斯うか生計立て、居るゆゑに宜いけれど、お前はさぞ迷惑に思ふであらうの」

「お上の御用は是非がござりませぬ、例へ食事を致しませいで、お役は勤めねばなりませぬ」と金次郎は石よりも堅かるべき決心を面に見せて

「お役人様御檢分とありや、私もお供がしたいものでござります」

「は、は」と作兵衛は思はず笑つて「お前は十二からお役に出たの」

「土堤普請には覚えがござります、土手と川とが家の仇と思ひまするゆゑ、何うかして二度と再び洪水のないやうにしたいと思ふて、暇さへあれば土堤へ遊びに出て居ります、それで近頃は土堤坊主など、悪口する者もござります」

「キ印と云ふ綽名の外に、又隘口を叩くぢやの」

「土堤坊主に違ひござりませぬ、あの土堤には私の心が籠めてござります」

「何時に變らぬ感心な心懸けぢや、明日からはお役に出て、何時もの土運び

して呉れるぢや」

「唯年の足らぬのを残念に思ひます、力の足らぬを口惜しう思ひます」

金次郎の詞に一として熱誠の響かぬはあらざりき、一念酒匂川堤防の事に思ひ至つては、富次郎が乳を求めて直泣きに泣く聲さへも耳へ入らざりき



第四章

(一)

朝霧漸く晴れんとして、東の山の端に紫の雲棚引く、酒匂川の流れは急に、滔々たる水の音物凄く明方の堤に響きて、水際の枯芦宛ら負傷兵の脊に立つ亂れ箭の如く見ゆ

断雲は幾片、その間に見ゆる星の光りは幾個、霧の晴れ行くに伴れて、瀬々の網代木波白く見え、道芝の露の溢るゝごとに、星の光りは一つ一つ消ゆ、時は師走の半を過ぎて、不二が嶺高く吹き来る風は、身を切るが如く浙瀝たり

この荒涼たる土手の上に立ちて、天の明け切らぬ中より、勞役に服するは金次郎なり、折柄來かゝりしは村役人の端にも列る彼の貫四郎なりき

「やゝ」と詞鋭く「其處に居るはキ印の土手坊主でないか」

「金次郎でござります」

「早うから何をして居る」

「土を運んで居ります」

「偽を云へ、斯う早うから勞役につく者があるか、は、これは知れた、おのれ人の來ぬ間にこのあたり徘徊うて、遺失物でも拾はうと云ふのぢやな」

「私は目標のない事に骨を折るのは嫌ひでござります、目標のない遺失物を探す手間で、一足の草鞋でも作ります」

「相變らず理屈を云ふの、その口がようも割けぬ」

「私は利慾の他に物を見ぬお方の目が、何故盲れぬかと不審に思ひます」

「然し目標がなうて朝早う来る筈がない、寅刻に來ても辰刻に來ても、一人は一人ぢや、別に貸銀を下さらぬ、そなた思ひ違ひして居るな」

「私は子供でござります」

「子供は知れてある、子供なりや朝早う来るものかの」

「子供は力が足りませぬ、大人の二層倍働いても、一人前の仕事能きぬでござりまする」

「それで朝早うから來て働くか」

「一時を二時にして力の足らぬを補ふ心でござります」

「何時まで経つても瓜は瓜ぢや、お前はよつほど阿呆ぢやの」

「人は何んともござりませ、私は自分の心に澄むやうに致します」

貫四郎は遂に答へに究りて、足早に去らんとしたるが、忽ち引き返して

「今日は御普請奉行村田阿波守様御檢分ぢや、粗忽のないやう致せ」

貫四郎は村役人の末席として、土堤普請の模様を内檢分するなりき

「今日はいよ、お奉行様御檢視でござりまするかな」

「粗忽があると容赦はせぬぞ、萬事に氣を注げ」

これを嚴かに云ひ終りて、貫四郎は次第に淡れ行く朝霧の中に没し去りぬ、その後へどやくと來りしは、同じ勞役に服せる五六人の村人なりき

「お早うござります」と金次郎は一々挨拶して「これは眞の粗末でござりまするが、お穿きなされて下さりませ」と新しき草鞋五六足を取り出しぬ

「お、金次郎、この草鞋は何んぢやの」

「夜仕事に作ったのでござります」

「それならば私共へ呉れるには及ばぬ、そなた穿かつしやれいの」

「いえ、私には適ひませぬ」

「聞けば殊の外貧しうして居さつしやるげな、賣て米代の補足にさつしやらぬかいの」

中には真情のある者もありき

「お米の補足にする分は、お母様の手へお渡し申してござります」

「その上に又この草鞋を作つたぢやな」

「へえ私は子供でござります、皆様のやうにお仕事が出来ませぬ、それで何とか他に補ひの道を立ていでは済むまいと存じまして、夜半まで草鞋作つたでござります、粗末なれど私の志、皆様お納めを願ひます」

斯うと聞きたる人々は皆その心の清きに泣きぬ

「何んと有難い心ではないか、自分は子供で力が足らぬ、それで夜仕事に草鞋を作つて、私等に贈つて呉れやうとは、まこと神様でもならぬ事ぢや、金

次郎どの有難う受けまますぞ」

「皆様受けて下さりままするか」

「お、受けいでかいの」と村人は異口同音に

「この草鞋にはお前の真が籠つてゐる、私は戴いて穿きまますぞ」

「爾う云つて下さると、誠に嬉しう思ひます、寐れば寐るほど空に消える夜の間を、起きて働いた甲斐あつて、皆様から禮の一言を聞いたと思へば、こんな釈ばしいこととござりませぬ、寐て居ては誰も禮を云つて下さることもござりませぬ、今日は私、豪い得をしてござります」

「何とぞア慈いた心掛けではないか、寐て居ては空に消える、その間に草鞋作つて、自分の力の足らぬ處を補ふと云ふ、こんな心掛けの人が、又と一人あるであらうか」と一人の百姓は感心の目を光らせながら「然し、正直な心には神様の御加護がある、今に利右衛門殿の名跡を繼いで立派な人間に爲らうぞや」

「これを思ふと乃公達は詰らんものぢや、此處の仕事をして歸ると、もう膳

の上の酒が戀しくなる、酒を過すと眠くなる、寐て了へば大事の時を、ひざりと消して了ふ、乃公達が酒を呑み、寐る間も、金さんは草鞋作つてござるわの」と他の一人は吐息して「今夜からは乃公も稼ぐぞ、毎晩一足づゝ草鞋作つても、一年には三百六十足作られる、空に過すのと物を作るのと、これほど蒙い相違はないのう」

「誠に附うぢや」と一同が金次郎の前に頭を垂げて「お蔭で乃公達の目が覺めた、活きた青標紙とはこなたの事、禮を云ふぞよ〜」

「え、勿體ない、そんな事して下されては却て私が痛み入りませす」

云ふ時彼方に人の歩音して「御檢分ぢや〜」と罵る聲、川の水音に交りて聞こゆ、一同は首を縮め、目を細うして

「江戸お役人の御檢分ぢや、粗忽してお目玉を戴いてはならぬ、金さん此方も土手の下に屈つしやれ」

云ふより早く枯芦繁る河原の中に土下座しぬ、されど金次郎は其儘其處に突立ちき

「これ〜」と心ある人々は枯芦の間より聲を掛けて「そんな處に居てお谷めを受けてはならぬ、此處へ来て下座さつしやれいの、江戸のお役人は荒神様よりまだ斯著でござるといの」

「いや〜、私はお役人に云ふことがござりませす」

「お役人様に……不禮あつては大變でござるによ」

「人々は聲を秘めて金次郎に意注けたれど、金次郎は泰然たりき、宛ら大木の地より生へたるが如く信として、次第に近くなり來る檢分役人の一行を堤の上に待ちたりき

(三)

酒匂川の堤御檢分の役目を受けて、此日江戸より出張せるはお作事奉行の配下に屬する御普請奉行村田阿波守なりき、式の如き供廻り、式の如き行装その身は金銀物打ちたる乗物に乗つて、仔細に土手普請の模様を檢分す、後には村役人、村の有力者従ひて、それ〜説明の任に當りき

「お側には貫四郎最も近く進みて、一々阿波守の質問に答へ、それとは二問ほど遠ざかりて、岡部善右衛門村の庄屋と共に従ふ」

「おのれ土手坊主、まだ此處にぐづぐづするな」

貫四郎は金次郎を見るが否な、大聲に斯く叫びぬ、されど金次郎は答へざりき

「江戸お役人様の御檢分ぢや、おのれ其處に何をす」

恐ろしく目を光らせて金次郎を睨み付けぬ、金次郎は相變らず無言なり

「不禮をするに命が無いぞ、退け」

されど金次郎は身も動かさず、堅く結びたる唇を僅に開いて

「土手の事は私が一番詳しうござります」

又その様な減らず口する、おのれお役人様のお怒が目注に注かぬぢやな

「お役人さまなればこそ、心付いた處を申し上げるのでござります」

金次郎は幼少ながら斯くの如く自信強かりき、此の如く權威を恐れざりき、更に斯くの如く金満家に膝を屈せざりき、彼はこの當時より、人間誠實を以

てすれば、いかなる物にも對し得べしと信じて居たりき

「やア乞食にも劣つた貧乏人の癖に、口廣いことばかり云ふ、云ふことを聞かぬと承知せぬぞ」

「私乞食は致しませぬ、貧乏人でも金持でも、同じ村の百姓でござります」

「まだ云ふか、おのれ……」と貫四郎は鐵の如き拳を振り上げぬ

「待て、何事ぢや」

「待て、何事ぢや」

思ひ掛けなくお側の中に聲ありき、阿波守は早く此様に心注けたるなりき

「お怒に對つて不禮致すものでござりまする」

「まだ子供のやうぢや、捨て置け」

誠に鶴の一聲、貫四郎は忽ちに口を噤む

「お役人様へ申し上げます」と金次郎は恐るゝ様もなく詞を掛けぬ、彼は其場に土下座せるを、乗物の側近くへ匂ひ寄るなりき

村役人、有力者、及びこの邊りに土下座せる百姓は皆な金次郎の爲めに手を握りぬ、彼は取るにも足らぬキ印なれど、彼の平生を知らせ給はぬお役人

は、不禮儀として恐ろしき制敗を加へ給はん、疾く去れ、去りて安穩の場を求めよ、と口には云はず心の中に念じたりき

「退れ」

「恕側に付き添ひし供人は斯く叫びぬ、金次郎はそれにだも恐れざりき

「私は村中で一番よく土手の事を知つて居ります、それでお役人衆へ申し上げる事がござります」

「退れ」不禮をするに承知致さぬぞ

「村の爲めに申し上げたいことござります」

「退れ」退れ

乗物の窓よりは阿波守の顔出でぬ、金次郎は又仰ひ寄る

「退れ」退れ

「待たう」と一聲、阿波守は詞を和げて「此方誰ぞや」

「この村の草分、二宮銀右衛門の末同苗金次郎でござります」

「我等に云ふことありと云ふ、何事ぞや」

「この村は私の先祖が拓いたのでござります、この村を暴らすのは酒匂川の水でござります」

「由て土手普請を致すのぞや、そなた勞役に服するではないか」

「その御普請に仕様がござりまするに、恐れながら村役人衆には、水の流れを十分に御存じござりませぬ」

「そなた知つて居るぞやの」

「どうかして先祖の拓いた土地が全うしたうござります」

「好い心掛けぞや、さらば不審の點を訊ぬる、一々説き明しくれやうの」

「そのお願ひに出たでござります」

「子供ながら愛い奴ぞや、金次郎を恕側に付けて置け」

貫四郎は一語もなかりき、阿波守は子供の詞にも重きを置きぬ、人々に乞食の如く卑められし土手坊主は、村役人の間に交りて、その説明の任に當りき、小さき胸に躍れる大きな至誠は、やがて普請奉行を動かせしなりき

(四)

何事にも第一に口を出して、物知り顔せる貫四郎の説明よりは、乞食の如く襤褸を纏ひて、まだ乳臭き口に説明せる金次郎の詞明瞭に、且つその當を得たる事多かりき。

「この邊りは皆淺瀬でござります、なれど一たん洪水となつた時には、この土手に水當りが強うござります、此處を十分に堅うせねばなりませぬ」

阿波守は再び貫四郎の返答を待つ要もなく、總てを金次郎に語り訊ねき

「此處へ蛇籠を置いては何うぢや」

「流れに應じて置くでござります、仕方悪しくは一日も持ちませぬ」

「仕方に手術あらうかの」

「百千の手術よりも、唯一つの賊が大事でござります、蛇籠の底に村役人衆の賊を籠めてお入れなされたら、何時までも持つであらうと存じます」

「いかにも爾うぢや」と阿波守は愈よ感じて

「人の賊が土手の楯となる、金次郎の云ふた詞、一同よく胸に疊んで聞かうぞ」

金次郎の身には急に光りの添ふが如く覺えき、善右衛門も大庄屋も、小田原より付き添ひ來りし役人も、みな金次郎の云ふ處に動かし難き道理あるを覺りぬ、されど唯貫四郎のみは不平なりき、金次郎の如き少年におのれの功を奪はれたる如き様を見ては、心中の不平禁ずるに由もなかりき

憎き奴かな、おのれ今に目に物見せて呉れやうぞ、とは此時貫四郎の胸に湧き來りし思案なりき

今日の檢分は金次郎の爲めに利益せられて、半日あやりに終りを告げぬ、阿波守の一行は休息所と定めある善榮寺に引き取りぬ、村役人、貫四郎も又従ふ

金次郎はその行列の枯田の中を過ぎ行くを見送りて、茫然と土手の上に立ちぬ、その周囲を取り巻くは、彼に同情せる村人なりき

「金さん、蒙いことせられたのう、お前の云ふたことをお奉行様は一々お取

り上げになつたやうぢや」

「これで土手坊主も、無駄にはならぬでござりませした」

「それに彼の貫四郎を、手厳しう遣り付けて遣つたのう、私は彼の様子を見て、急に胸の悶えの降りるのを覺えたわよ」

「貫四郎の辯口もお奉行様の前では役に立たぬ、そなた序に田地買うて返さぬ事を何故訴訟せなんだな」

「田地の賣買は、私事でござりませす」

「私事であらうが何んであらうが、公儀のお役人は善悪のお捌きを爲さるがお役ぢや、恰ど貫四郎も其處に居る、私が此方なら面の皮を引き剥いて遣らうもの喃」

「土手普請の可否は、栢山の百姓、幾百人の生命にも關はりませす、その一大事なればこそ思ひ切つてお役人様へ詞も掛けてござりませするが、高の知れた一反二反の田地、金さへあれば何日でも買ひ戻すことの能きる物、それほどの事でお役人様のお耳を驚かせては済みませぬ」

金次郎の少き頭惱は、物の大小輕重を識別するに、宛ら百鍊の鏡を懸けたるが如く明かなりき、彼はこの寒空に一枚の布子を作るほどの餘裕さへ持ち得ずして、金さへあれば何日にも買ひ戻し得べき田地なりといふ、貧の爲めに有らゆる憂目に遭ひながら、金を見ること鴻毛よりも輕かりき、彼が誠實を前にして富貴を後にせる清き心は、土手坊主たりし此時よりの主義なりき。

「それも爾うぢやが、考えるほど貫四郎の行爲が憎い、まだ善榮寺に居るであらうに、そなた行て御奉行様へ訴訟さつしやらぬか、證據人には私等が爲る、私等が後に控えて居つて、お前達に敗を取らせる事はせぬに……どうぢや、すつくりと思ひ立たつしやらぬか」

「それまでを爲すとも、事でござりませす、些細な御訴訟をする暇で、土運でも致します、費うた金の返る時はあつても、過ぎ去つた時の二度來る期はござりませぬ」

金次郎は斯く云ひ終りて、脊を肩に去らんとしぬ、折柄村人の背後より顔

を出せしは善右衛門なりき

「これ〜」と丁寧に呼びかけ「何と物は相談ぢやが、この普請も十日ほどすれば方付く、後で私の家へ奉公しては呉れぬかな」

「へえ」と金次郎は思ひ掛けぬ顔をして「私の如なもの、何のお役にも立ちませぬが、それでも大事とざりませぬか」

「いや〜、お前の心に十分の見所がある、村の名物にもなるやうな立派な人間にして見たい、雇はれては呉れぬか」と思ひ込んだる様なりき

(五)

「善右衛門様、さて好い處へお氣が付かれた、村の爲めには公儀御奉公も恐れず、つけ〜と詞を交す膽の太さと云ひ、寐る間も寐いで私等の穿く草鞋を作り、子供の手で足らぬ仕事を補ふとある志、尋常一様の人間では無い、お山どのも樂に食へるほど賃銀して、お前の家へ雇はつしやれ」と村人も口々に云ふ

「村の衆も此通りに云はつしやる、給銀も澤山は遣られぬが、お山どのに二人の弟が食ふて行かれるほどの事はする、どうぢや来てくれる心は無いか」と善右衛門は再び云ふ

「私、賃銀は澤山にも要りませぬ、母様の生活の補足は、夜仕事しても作りませ、其代り書物讀ませて下さりませすかな」

「讀ませる段ではない、恰ど寺子屋のお師匠様がお入來で、倅の爲めに素讀や講義をして下さる、それをそなたも知つて居るではないか」

「それなら坊様が御本お讀みなさる側で、仕事しながら聞くことも能きませるな」

「私の方から勸めはせぬが、學問はお前の心掛けにある事ぢや、のう皆の衆、爾うとも〜、一日の仕事を終つてから、好きな青標紙の稽古をするに、誰一人文句を云ふものがあらうかよ、金さんのお主に善右衛門様、梅の枝に爲

を止まらせられたほど似合ひませるな」

村人は口々に云ふ、金次郎は思案に沈む、善右衛門は又進んで

「本が欲しけりや、倅の讀んだ大學もある、論語もある、手習がしたけりや、善榮寺様がお書きなされた實語教の手本もある、それも皆な貸して進せう」

「わア有難いことでござります、母様とも相談して、後から御返事に参ります」

「お由どのに不承知さへ無ければ、そなたきつと来てくれるな」

「お役には立ちませぬが、年齢相當の仕事は致します」

「お前が来て呉れたら、倅に學問の伴侶も出来、此様な嬉しいことは無い、どうぞ相談して下さい」

「明日は私が御返事に参ります」

善右衛門はこの返答に満足して、奉行の滞留せる善榮寺へ急ぎ行きぬ、此時寺子屋より早退りせし五六人の村の兒、黒く白き種々の草紙持ちて、土手の寒風せむぎに吹かれながら、隊を組みむらて此方へ來掛るが有りき、金次郎はその中に最も白き双紙持てる子供の側へつかへ寄りて

「此方桂さんぢや喃」と出しぬけに聲を掛けぬ、桂太郎はこの村に篤志家の

聞こえある服部權右衛門の二子なりき

「や、土手坊主が來居つた、逃げろよ」

他の子供は宛ら蜘蛛の子を散らすが如く逃げ去りたれど、桂太郎のみは金

次郎の前に立ちてありき

「金さん、何ぢや」

「頼みがある、聞いてたもらんか」

「頼みとして私は子供ぢや、お金の事なら、お父様に云はつしやれ」

土手坊主が來たとて、他の子供に逃げらるゝ金次郎は、頼みがあるといふ口の下より、直にお金の事ならと卑み弾かれぬ、誠に彼は他の子供に恐れらるゝほど、恐しき風俗してありき、圓き眼は明星の如くに輝き、黒漆の如き髪は宛ら蓬の如くに亂れかゝる、太き眉毛、隆き鼻、右の鼻の下と上唇との間にある黒子は、月の上に黒き點を打ちたるが如く見ゆ、然も雷の如き聲を上げて

「私は金の無心を云ふのぢやない、金が欲しけりや働いて儲けるわ」

「それなら何の頼みぢや」

「双紙を貸すのぢや」

「この双紙を……」と桂太郎は怪みながら「これを何にさつしやる喃」

「双紙は手習ひするものぢや、それに此方の双紙、甚う白いの」

「まだ新しいのぢや」

「その新らしい双紙に、何か書かせて下さらぬか、私はお前達と違ふて貧乏に暮らして居るゆゑ、まだ新らしい紙に字を習ふたことがない、どうぢや、唯一筆書かせて呉れぬか、私がお前に頼みたいといふたは、この事ぢや」

桂太郎は双紙を其處へ突き出して

「何んなりとも書きなされ」

「お、書かせて呉れるか、流石権右衛門殿の子ぢや、大家に生れた者は、その大きい心が無うてはならぬ、どれ」
と金次郎は手に取たが「お前、墨汁は持て居るまい喃」

「墨汁は持たぬが筆はある」

「筆ばかりで字は書けぬ、といふて土手の上に硯もあるまい」

「墨汁ならこゝにあるよ」と村人の一人は腰に挿したるを取り出し與へぬ

「大きに有難うござります、私は生れてから始めてこんな新しい双紙に手習ひします」

金次郎は桂太郎の持ち合たる筆に墨を含ませて、白き双紙にすら〜と走り書きせしは、左の如き文字なりき

『一日に一字づゝ習へば一年には三百六十五字となるぞ此小僧』

桂太郎が憫れ顔して突立てる前へ、彼の双紙を突き返して

「よう貸して下された、澤山に禮を云ひます」

桂太郎は双紙を受け取ると共に、逸足出して駆け行けりき、彼が小を積み大を成すべき教訓は、土手坊主を禪名に呼ばれし、この當時よりの主義なりき



第五章

(一)

金次郎が一日の勞役果て、鍬と畚とを肩に我家へ歸り來りしは、夕日西の山の端に沈みて、善榮寺の暮の鐘淋しく、瀬戸の木枯夕暗吹く時なりき

「お母様、唯今歸りました」

がたびしときしむ戸を颯と開けて、足一步敷居を跨ぐ、例は佛壇に御燈火、その前に夜仕事の姿見る母お由が敵れたる夜着引き被きて、片隅に打ち伏し居たりき、金次郎は見るからまづ胸の塞がる思ひして

「お母様、どうなされたのでござります」

ずつと入りて上り栞に腰掛け、草鞋の紐を解かんとする時、弟の三郎左衛門は裏口より笊を抱えて入り來りぬ、お由は寐入てやある、幾度言葉掛けても返答無かりき

「三郎でないか」

「兄様お歸りなされませ」

「そなた裏で何して居やつた」

「菜を洗ふて居りました」

母は起きるより寐るまで賃仕事細草鞋、兄は星より星を戴いて酒匂川堤防の勞役に服するなれば、幼く父を失ひたる彼は母に代りて、炊事洗濯の術にも従ふなり

「菜は何日でも洗へる、お母様御氣分でも悪いことは無いか」

「今日はお午時から泣いてばかりお在でなされませ」

「そなた何か不孝をしたでは無いかの」

「私は何も致しませぬ、例の通りにお湯を沸し御飯を焼き、お手習もしたでござります」
と三郎左衛門は寒さに凍るが如き手に、はッ／＼と息を吹き掛けつゝ、「それにお母様御飯も喫らず、二時も前から斯うしてお寐みなされたでござります」

「二時も前から……御飯も喫らず……さりと御病氣に相違ない、それ

なら何故私の處へ知らせてはたもらぬのぢや」

三郎左衛門は答へなく茫然と立ちて、凍えたる手に息を吹き掛け居たるなりき

「御病氣とあるを御介抱もせず、氣樂さうに裏へ出て菜を洗ふといふがあるか、何よりもまづ燈火を點けるぢや」

三郎左衛門は噛み付くやうに叱られながら、毫腹立ちたる様も無く、頬に燈石を打つなりき、金次郎はこの間も急がしく母の側へすり寄つて

「お母様、何うお悪いのでござります、金次郎唯今歸つてござります、と枕頭に手を突いて云ひたれど、お由は更に答へなかりき

「何かお氣に障つたことがあれば、私幾重にもお詫びを申しませ、御氣分をお直しなされて、唯一言お詞をお掛け下さりませ、もしお母様、お母様」と夜着の中をさし覗く時、三郎左衛門は漸と行燈に火を點して、兄の前へ持ち來りぬ

金次郎はその光りに母の夜着の袖一目見て、臆魂も身に添はぬまで驚きぬ、

繼々に縫ひ合せたる間より淡黒くなりし綿は笑み出す、その綿は水を含みたる藻の如くに濡れ、濡れたる綿はぼつとりと重く母の顔の半を掩ふ、枕と云はず、襟と云はず、涙流るゝが如くなりて、冷き露、凍れる雫の憐れなる間に、母は死したるやうに横はりき、金次郎は何の故とも知らねど、この涙には深き仔細の籠り居れるならんと察しぬ、普通病氣と云ふにはあらず、人にも云はれず堪ゆるにも堪へ難き深き仔細あるならんと察しぬ
斯くまで母の心を掻き亂す仔細は何なるべき、斯くまでに母の涙を縮る仔細は何なるべき、常事にてはあらずと、金次郎は又進み寄る
「お母様、この御様子は何事でございますか、何をこの様にお嘆きなさるのでござります、物の數ではござりませぬが、私も男でござります、この二宮家の生拔でござります、お一人で御心配なさらず、何故理由を話しては下されませぬ、私が土手普請に参つた後で、何か口惜しいことがあつたのでござりまするか、彼の面憎い貫四郎が来て、悪口したではござりませぬか、どうぞ理を被仰つて下さりませ、もしお母様、お母様」と再び顔を覗き込みたれど、

お由は尙答へ無く、夜着の袖を顔に當て、潛々と泣き沈む、

「此ほどに申し上げても、まだお詞は下さりませぬ」と金次郎は力無く頭を掻げしが「三郎、そなたお母様に不調法をしたでは無いか」

「私は何も知りませぬ、私は例のやうに御飯焼き、お洗濯をして……」

「いや」と金次郎は遮つて「そなた不調法をしたで無くば、お母様このやうにお腹立の筈は無いのぢや」

「それでも私と云ひ掛けし三郎左衛門の面の上にも雲懸りて「何も悪戯した覚えはござりませぬ」

「さらば私が土手普請へ行つた後へ、誰か来た者がありはせぬか」

「誰もお入来はござりませぬ」

「必然無いか」

「必然ござりませぬ」

「そなたお母様のお側に居たの」

「今日はお母様御氣分がお悪いので、遊びにも出ずに居りました」

「いや、又紙幣でも揚げに参つたのでは無いか」

「そんな事はござりませぬ」

「お母様御様子を見るに、一通の御病氣とは思はれぬ、そなたお側にありながらお腹立の理知らぬ法は無い、秘し立てをすると承知せぬぞ」

「私、秘しは致しませぬ」と三郎左衛門は身を硬うして、白き眼に兄の顔視遣りながら「お母様、御氣分が悪いとお寐みなされたのでござります」

「それにしては物を仰せなさらぬ筈が無い、これを見よ、このお夜着の濡れて居るのを見よ、普通の御病氣で此様にお嘆きなされる理があらうか」

金次郎の詞は雷の如く太く、然も太き中に無限の悲哀、無限の誠意籠りて聞こえき」

(二)

外には木枯寒く一輪の月を吹きて、何處より舞ひ来るともなき落葉、ばらばらと傾きたる軒に注ぐ、金次郎は手を又みたるのみ詞無く、三郎左衛門は

その前に兀如と坐りて、恐しげに兄の顔を見詰ひる、弱き燈火幽に照りて、お由が齒を切る音、戸に當る寒き聲に和りて、夜は寂寥と更け行くなり

「三郎、母様はともにお宥怒が無いと見ゆる、私も御意に遠ふた覚え無く、お前も不調法を爲たことは無いと云ふ、されば御病氣に相違ない、お胸か、お腹か、苦痛に堪へかねて、これほどお嘆きなされるものと見えた、私はこれから氏神様へ洗足参りをする、お前は道齋様のお玄關へ参つてお薬の調合をお願ひ申して来るぞや、此處が悪いと際立つて仰せなされぬは、私やお前に心配を掛けさせまいとお心ぢや、さ、早う行きや、私も直に出掛けます」

三郎左衛門は點頭きながら立ち上る、金次郎は佛壇の前へ匂ひ寄つて「お父様、今こゝで御覽せられる通りの事とござります、私も三郎も暫く他出を致します、その間お母様のお身の上をお守りなされて下されませ、お願ひでござります」

繰り返し、祈念する、三郎左衛門は千切れたる草履穿きて、門口まで行き掛けしが、又力なく立ち戻りて

「兄様、お腹が空きはしませぬか」と優しくも問ひ掛けたり

「御飯どころではない、お薬が大事ぢや、早う行きや」

「心得てござりまする」

「裾の切れたる布子寒げに、表戸を開けんとする時、お由は夜着の襟より顔を掻けて

「待ちや〜、それには及ばぬわいの」と涙に噎れたる聲なりき

「お、お母様」と金次郎は又此方へ寄て「御機嫌直らせたのでござりまするか、三郎ちやつと来い、お母様お詞を下されたわいの」

「お母様、お母様」と三郎左衛門はおろ〜して「お母様どうぞござりまする」金次郎は右より、三郎左衛門は左より、しと〜濡れたる夜着に縋りて、悲しげに問ひ掛ける、お由は止途も無くはふり落つる涙の間より

「二人とも恕して下され、私が悪いのぢや、私が心に病氣を作るのぢや」

「お母様お悪いことはござりませぬ、私ども心の至らぬのでござります」

「いえ、私の悪いのぢや、千萬兩の寶よりも孝行にして呉れる子に増す寶は

無いと知りつゝ、又しても愚痴に泣く、私のやうな罰當りが又とあらうか、もう〜泣かぬ、もう〜泣くことでは無い」と云ふ中も涙溜の如く「二人とも恕して下され、左ほどもないに伏つたりして……勿體ないこと

「お母様御氣分がお悪いのではござりませぬか」と金次郎は不審の體

「何處も悪うは無、二人ともさぞお腹が空いて居やらう、私に構はず、早う御飯を食べてたもれや」

「お母様はどうでござります」と三郎左衛門は健氣にも「お膳出して参りませうか」

「いえ、私は欲しうない、さづそなた二人……お湯でも熱う沸騰しての何故御飯召し上らぬのでござります」

「どういふ理か胸膨れがして、御飯食べる心も出ぬ、私は後で戴くわいの」

「お母様」と金次郎は言葉に力を入れて「私に物をお秘しでござりまするな」
「滅相もない、秘すことがあるものかいの」

「爾うお云ひなさいます、そのお詞に雲が掛つてござります、私はあなたの
お心を熱く存じて居ります、お母様、私はあなたの惣領でござりまするに、
それをお忘れはござりませぬな」

お由は枕の上に顔を當て、身も浮くばかりに泣くなりき、金次郎の云ふ
詞は一々温かい肉となりて、寝れたる骨を包むが如くにも聞え、又美しき
春風が枯れたる木梢に吹き渡りて、自然の花を着くるやうにも聞ゆる、

「それに何故物をお秘しなされます、私三郎左衛門、皆お母様御心中の御心
配承はるまで、御飯は食べませぬ、三日が五日假し飢ゑ凍えて死ぬるまでも、
決して御膳は戴きませぬ、喃ッ三郎、そなたもお母様お一人に苦勞させて、
安氣らしう御飯戴く心は無いの」

「私も御飯欲しうはござりませぬ」

「よう云ふた、それでは斯う膳の上に両手をついて、お母様御機嫌の直るを
待たうの」

金次郎と三郎左衛門とは齊しく膝の上に両手をついて、母の機嫌の快くな

るを待つ體、お由は堪へ難ねて又涙の顔を擡げぬ

(三)

「私は後で戴くほどに、二人とも疾う………」と露に光る眼を脇へ外らし
て「三郎、お湯が沸いて居やうの」

「いえ」と金次郎は詞強く「御心配の御様子承はるまで、御飯は戴かぬ覺悟
でござります」

「それでは二人して此母を苦めるぢや、御飯食べて呉れやつたら、私の胸も
開けようわいの」

「私はお母様と御一所に戴きます」

金次郎と三郎左衛門とが、眼じろぎもせず坐り居れる様をお由は熱々見て
居たるが、やがて徐に起き直りて

「實は金次郎、私は乳が痛うてな」

「え、お乳房が痛むでござりまするか」

「そなた二人に心配を掛けてはなるまじと思ふゆゑ、今日まで堪へに堪へたが、乳汁が張て嚙む子の無いほど、苦しいことは無い物ぢやの」

云ふ中にさし垂頭きて、お由は顔を打ち覆ひぬ、云ふにも云ひ難き心の辛さを、襦袢の袖に包ひなりき、襦袢の間に迷る玉われ村時雨、その一露に萬斛の愁ひは満ち、今の一言に千萬無量の悲みは籠りぬ、もし金次郎が普通の兒、普通の人ならましかば、唯陽に溢るゝ涙のみを見て、陰に満つる哀みの色を見ずして止むべきに、金次郎の心は宛ら稻妻の如く鋭く、然も稻妻の如く光り且つ輝きて、直ちに心の裏を照らしぬ、母様が例に無く夜着引きかつぎて打ち伏し給ひしは、身に故障あるにもあらず、心に病氣あるにもあらず、正しく乳房の痛めるなりき、乳房の張りて痛めるにつきて、その乳房に絶るべき富次郎の懐しさを思ひ出し給へるなりき、

父上は御病死、家は今にも覆へるべき貧困、その間少しにても御心を慰むべきものあらば、そは他にても無き富次郎の笑顔ならん、親と子は皮と幹との如く、肉と骨との如く、肌と髪の毛との如く、何れを脱り放つとも他の一方

は必ず枯死せん、われ苟にも惣傾と生れて、當家の後を繼ぎながら、同じ根に咲きたる花を、情無くも人の手に渡して、母様の御嘆きを思はざりしは、真に人道の罪人なりき、母様は御乳汁の餘れるに苦みたまひ、富次郎はその乳汁の營養なきに、見る蔭もなく瘦せてやあらん、母様の御病氣を快くするは、御乳汁を快くするにあり、御乳汁を快くするは乳房に絶るべき富次郎を迎え来るにあり、氏神の御社へ洗足参りとまで心付きながら、富次郎を引き戻して、御病苦の根元を吸はするに氣の注かざりしは、何といふ魯鈍なりしぞ、

「お母様、私そのお乳汁快くする道考えてござりまする」

「ほ、私の……」とお由は涙の中に淋しう笑ひて、乳汁を快くする道があるぢやの」

「きと思ひ付きました、今から参つて富次郎取り戻して参りまする」

「富次郎を……」と思はず一膝乗り出せしが「いや、それは爲らぬ、それは爲らぬ、今さら左様なことをしては、利右衛門殿の御位牌へ澄まぬ、

御近所へ澄ませぬ、私の心へ澄ませぬ」

「御心配なされませぬ、お父様は三人の兄弟が別れ〜に育つのをお喜びはなされませぬ、同じ根に咲いた三本の花、一もと剪つて育つ筈はござりませぬ」

「切角思ひ切つて預けたもの、取り返しては世間へ澄ませぬよ」

「世間は冷い風が吹いて居ります、母子四人が餓ゑに泣くを、誰一人救ふものもござりませぬ、世間は世間、當家は當家、貧乏が不幸では無うて、母子兄弟別れ〜になるが、第一の不幸でござります、御心配なされませぬ、私が一走りに取り返して参ります」

「まア待てたも、とお由は悲しげに追ひ絶つて「そなたは其様に云ふてたもるが、富次郎を預けたはそなたや三郎左衛門を助けたいと思ふからの真心、それを又呼び返しては母子が好んで深い淵へ沈むやうなものぢやわいの」
「何事がござりませうとも、私は自分の弟を他人の手へ渡して置くのが不承知でござります、富次郎が歸つてお母様のお手が引けりや、それだけは私の

手で補足をお付け申します、唯今子刻まで夜仕事するのを、丑刻まで延ばして爲れば富次郎の養育料ぐらゐは、見事に取れるでござります」

「それでは澄ませぬ、此上そなたに苦勞掛けては、私の心は澄ませぬわいの」

これと目的を付けたる事には他目も觸れず、一直線に進み行くが金次郎の主義なりき、直ちに立ち上りて、

「これから作兵衛様お宅へ参ります、三郎はお母様お側で孝行するぢや、」

「金次郎まア〜待てたもれ、それにしてからが今夜には及ばぬ、今夜は寒い風が吹くわいの」

「母子四人が一所に寄れば、寒い夜も温かになるでござります」

云ふ中に早や下へ降りて、敷れたる草履や穿きたる、びた〜と濡りたる音聞こゆ

四

後にお由はおぞ〜と匂ひ出で、佛壇に燈明を捧げぬ、鶴の嘴の燭臺よ

りは黄蠟の火明く照りて、涙の痕斑に残る顔の半面を斜めに射りぬ、お由は先祖代々、夫利右衛門、夫等の戒名を繰り返し、云ひ續けて、細き線香の一二本を手向け、最後に「南無阿彌陀佛々々々」と唱名念佛して、瘦せたる手を前に合せぬ、三郎左衛門も母の背後より、健氣に父の戒名を唱へ居たり

寒き風に煽かれて、柳の枯枝ほそくと戸を叩く時、門口に草履の音凍るが如く聞こえしが

「お母様、唯今、富次郎も無事に伴れて歸りました」

にこくと笑を見せて、引き開けたる雨戸の間より一足裡面へ踏み入れたるを、お由は一目見るより飛び立つ如くなりて、南無阿彌陀佛——と長く引きたる聲も切れぬ中、轉ぶが如く上り框へ駆け出で

「お、富次郎、よう歸つたの、この寒いによろ歸つたの」と片手に懐を掻き開けて、片手を富次郎の肩に掛けつ

綿より柔かき肌を抱かるゝも、蜜より甘き手に撫でらるゝも、肉身の親な

らぬ他人の慈愛は、表面を吹く風の如くにて、深く骨には達かぬなりき、作兵衛は情あり仁義あり、今は世に無き利右衛門に對する義理として、心の有らん限りを富次郎の養育に注ぎたれど、他人が一日の愛情は、實母が一時の愛情に及ばず、他人が三日の養育は實母の半日の養育にも足らず瘦やつれて、ふつくりと白かりし頬は瘦せ、鮮かに明かなりし眼は曇りて、簍れたる身に衣服の美しきのみが眼に付きぬ、

「さア、お母様のお乳を戴くぢや」と金次郎は脊負ひたるを母の手に渡して「どうぢや、嬉しからうの〜」

「お乳下され、お母様お乳下され」と富次郎は甘へたる聲に乳を探りて、冷き頬を母の胸に押し當てつ

「ほゝ、この冷たい顔はいの、富次郎のこの冷たい顔はいの」

「外は恰で剣を吹き付けるやうでござります」と金次郎は火鉢の上へ枯枝を積み上げて、それへ火を燃し付けながら「富次郎温からうがの、お母様これでお温りでござりませうがな」

「お蔭で乳房も樂になつた、道齋様のお薬よりも、氏神様のお利益よりも、我子の情愛が病氣には一番效くわの」

「澤山飲ませてお遣りなされませ、その中にお湯も湧きます、お湯が湧いたら御飯召し上りませ」

「斯う苦痛を忘れるも、そなた孝心の賜物ぢや、我子とは思はぬ、神様とも佛様とも思ふて、死ぬるまで恩に着ますぞ」

「勿體無い、何をお云ひなさいます、假令この髪毛を一本づゝ抜き脱つて、お薬に煎じるとも、お母様のお爲とあれば厭ひませぬ、況してこれほどの事、恩に着るの、忘れぬのと、もうゝ其様なこと被仰つて下さりまするな、富次郎は私の爲めにも弟、お乳に縋つて嬉しうにばちゝと眼を開いて居る、あの可愛さを御覽なされませ」

「作兵衛様、お腹立ちでは無かつたかの」

「些もお腹立ちとはござりませぬ、母子兄弟同じ釜の湯氣で育つのが、自然の道、人の誠の極意ぢやと被仰つて、却てお歡びでござりました」

「それを聞いて私も歡ぶ、これ富次郎、そなた兄様の大恩を忘れてはなりません、せぬぞ、さアゝゝ好い加減にお乳を止めて、お父様へ御挨拶申し上げるぢや、お前のお父様、このお佛壇のお燈火の奥で、富次郎をお待ち遊ばして在らつしやる」

富次郎は母の乳より口を離して、むくゝと起ち上りしが、不審し氣に佛壇の奥を視入りながら、まだ十分には廻らぬ舌に

「お父様、お父様」と呼びかけ「唯今歸りました」

「三郎左衛門はこの中に膳拵へ、金次郎は沸騰り掛けし土瓶を取て」

「さ、御飯上りませ、お湯も沸騰つてござりまするに」

「それでは一所に戴かうの」とお由は涙の痕も無き顔に莞爾して「お父様へ御挨拶終んだら、富次郎もこゝへ来てお膳につくぢや」

富次郎は今日の珍客なりき、久し振に母子四人團欒して箸を取る、利右衛門の靈も我子我妻の美しき眞情を歡ぶらしく、佛燈の火、今宵は特に明かりき、線香の烟、今宵は之を煎り好かしく

「時にお母様、私あなたへ折り入つてお願ひがござります」と改まりたる口上、お由は驚きながら、耳を敬つる、金次郎はこれを冒頭に於て、今日岡部善右衛門より下人に懇望せられたる願末を物語り、「このお考えは何うござりまする」

「さて不思議、私の方にも同じやうな話がある、實は今日服部様がお越しで

の」

「服部様とは權右衛門様でござりまするか」
「爾うござや、權右衛門様お越しなされて、是非そなたをと御懇望ぞや、そなた今日服部の坊様に何か書いてお上げかの」

「お双紙に贅言をしたのでござります」

「それを旦那様御覧なされたと見えて、金次郎は年齢の割に心が老せてある、殊に優れて身體も大きい、定めて一人前の仕事もするであらう、給金は望み次第出すほどに、是非私の家へ越しては呉れまいかとのお詞ぞやつた」

「私如き不束兒を皆さま御負最にして下さります、是も皆お父様のお蔭、御

恩を忘れては爲りませぬ」と金次郎は佛壇の位牌を伏拜んで後「お母様、どう御返答なされたか」

「私もそなたの心聞かぬ間に、きつぱり申上げる詞も無く、何れ改めて御返答と、好いやうに云ふて置いた、善右衛門様も權右衛門様も、村中の金満家何方を御主人と定めても耻には爲らぬ、そなたの思案は何うあるか」

お由は金次郎の決心に待つ様見えぬ、金次郎の鬢の毛は風も無きに亂れ動きぬ、されど仍詞は無かりき」

「善右様はそなたへ直々、權右様は私へお頼み、何れを主と頼みやる氣、それとも、他人の前に膝は屈せず、貧乏はしても一本立ちの心勇ましう、家業に精出して行きやるかの」

貧乏はしても一本立の心勇ましう、家業を勵み勤めんことは、金次郎の原より望み且つ願ふ所なり、されど唯一本立とあるのみにては、眞の人間とも云はれじ、眞實の人間とならんには、人の道を知らざるべからず、正當に家名を再興するには父祖の御名を玉と輝かさねばなるまじ、人の道を知るは學

問にあり、父祖の御名を玉と輝かすは、自ら人の道を行ふにあり、學問は鐵の頭から出でず、物の道理は田の畦に轉がり居るものにあらざ、要は聖人の書を読みあれど、此れも家にありては田を作り繩紉ふ暇ありて、一冊の書を読み暇なからん、假へ人の寐る時を利用して、論語大學を暗記するとも、就いて道を聴く人なからば、その學問に生命なからん、今の境遇、師に頼るべき餘裕は無し、止むを得ずば兩家の中何れかに雇はれ、御子息の勉學させたまふ傍に侍りて、餘所ながら道を聴く他なかるべし、それには善右衛門殿を選ぶべきか、將た權右衛門殿に行くべきか

善右衛門殿御子息の師匠様には、幾度か道を聴きたることあり、御子息も亦た我等心中を知らせ給ふ、同じ膝を屈するならば、善右衛門殿を選む方利益ならん

「お母様、私善右衛門様へ参ります」

(五)

「爾うか、それでは善右衛門様へ行きやるか」とお由は機嫌克く「善右衛門様はお慈悲深うて在らせられる」

「爾うして一二年は他人の飯を食ふて来やうと思ひます」

「彼は云ひさして三郎左衛門を見ぬ、三郎左衛門は晝の疲勞、子供ながらも前よりの氣苦勞、それや此やに小き胸を睡魔に誘はれて、眼は今にも閉づべき様、富次郎は母の膝に抱かれて、四五日がほど見でありし兄の顔珍しく、黒暗勝ちの眼をまぢくと睨りてありき

「そこで三郎」と金次郎は詞を改めて「そなたに云ひ置くことがある、」

三郎左衛門は夢うつゝの境に點頭きて、こくりと前に倒れんとしぬ

「これ三郎」と例の破鐘の如き聲、三郎左衛門はこれに彈れて、きよると圓い目を睨る「坐睡をしては爲らぬ、人間いかに疲れたりとも、母様の御前で坐睡をするやうで、お父様のお名を揚げることは能きぬ、人は心の張が第一ぢや、心に張の無いものは得手して他の驥尾に付く、私は今度の土手普請を終ふとすぐ、善右衛門様のお宅へ雇はれる、すれば後はお母様お一人ぢや、

お前と富次郎とで私と三人前の孝行をせねばならぬ、よいか、心得て居やらの

「お母様に孝行を致します、兄様お留守となれば、草鞋作つてお鳥目を利けます」

「この心掛けがあれば、どうか斯うか餓は凌がれる、私も善右衛門様へ奉公すれば多いか少いかお給金は頂戴する、そのお給金は皆なお母様のお手へさし上げる心ではあるが、どれだけあつても足らぬのはお鳥目ぢや、もし私の給金で生活に不足した時、そなた何うして補ふ心ぢや」

「私、草鞋を作りませす、繩を縛ひませす」

「爾うして物には決定が無くてはならぬ、又日頃用心が無くてはならぬ、生活の足らぬ時は草鞋を作る、繩を縛ふ、その心掛けは感心ぢやが、それにも決定と用心とが要る、一年は十二月あるに極つて居るが、米の賣るのはたゞ一度ぢや、けれど世界の人間が、米は一年に一度より穫れぬものと決定を付け、それ／＼用心をして居るゆゑ、餓ゑる恐れがない、もし二年に一度、

三年に一度より穫れぬと極つても、人にそれだけの用意があれば何の苦もななく遣て行かれる、生活の不足も、勘定の不足も、みな不用心から起るものぢや、よいか、此の事をよく飲み込んで、第一には家の決定、第二には心の用意、これを忘れては爲りませんぞ」

金次郎は十四の時より早や用意用心の忽にすべからざるを説きぬ、三郎左衛門は兩手を膝に隠んで聞く

「合點行たとありや重ねては云ふまいに、母様へ孝養を専として二には富次郎への慈愛、私は側に見て居ずとも、お父様はこの佛壇に御目光らせて在らせらるゝ、富次郎を可愛がる心がやがて母様へ孝行、母様への孝行がやがて家の榮えとなり、孝悌慈愛と名は變れど、落つる處は皆な同一ぢや」

金次郎の詞は一々に道理ありき、一々に金石の響きありき、お由は心に好き侘持ちぬと歎びき、三郎左衛門は心にお父様を在さずとも、苦きお叱言の絶ゆる時は無しと思ひき、

「これの合點が行たら、三郎は寐や、お母様も御寝ござりませうな」

「そなたは喃」

「私は又草履作つて、子供の力に足りかねる土手普請の勞役を補ひまする」

「さればとても遅からうを、今日は休息しやいの」

「休息の底には怠惰の影がさすでござります、私は寐る暇を家の爲め身の爲め、他人の爲めに働くでござります」

(六)

金次郎は酒匂川土手普請の終るを待ちて、彼の岡部善右衛門の家に雇はれ、一方服部権右衛門の厚意に對しては、やがて時機を得て御厄介になる旨を断り置きぬ、金次郎は子供ながら些細の事にも脱漏なかりき

善右衛門は金次郎が約束を違へず家に雇はれ呉れたるを光榮として歡びぬ、金次郎は一面に於て岡部家の下男たると共に、一面に於てその子善太郎の學問の友なりき、晝は終日野に出で、耕作に従ひ、夜は更深くるまで草鞋作り細綿ひ、ある時は山に入りて薪を採り、又ある時は牛を逐ひて小田原の城下

に出で、身を粉に碎いて奉公の誠を盡しつゝ、少しにても暇ある時は善太郎の前に出で、大學の講義を聴くを例としき、論語の素讀を受くるを常としき、善右衛門はこの殊勝の状を見ることに、涙を流さぬばかりに歡ぶ

「金次郎よ、お前まだ夜仕事をして居るのかよ」

善 是晩酌の一盃に陶然となりて、圍爐裡の側に轉寐したるが、疎朶の烟も絶えくゞに、戸細を漏るゝ夜の風の肌寒きに驚かされて、不圖眼を覺ませば、家内の者は悉く寐靜りて、誰の夢、彼の夢、誰の寐言、彼の齒嚙、その淋しさを照らす一穗の燈火冷く夜は森々と更け行くに、倦む様もなく細綿へるは金次郎なり

「お目覺めでござりまするか」

「うとくと寐たと思ふたが、殊の外更けて居る、そなたもう寐まぬか」

「まづお寐みなされませ」

「よく其様に身體が續くの、仕事に精を出すも好いが、身體悪くしては詰らぬ、好い加減にして置かつしやれ」

心に油断さへ無ければ、若い身體に病氣などの付くものではござりませぬ、もう二三間紮ふた後で、本を讀ませて戴きます」

「これからまだ本を讀むぢやの」

「夫が何よりも楽しみでござります」

「はて好い心掛けぢや」と善右衛門は團爐裡の灰をかき起して、臭い烟草を吸ひながら「私はそなたの様な人を雇人にしたを嬉しう思ふ、本を讀むが楽しみとありや、夜仕事など爲るには及ばぬ、日が暮れたら何も彼も捨てといひ、精出して御本讀まつしやれ」

「有難うはござりまするが、私はお給金を頂いて居ります」

「給金なら晝間の仕事で十分ぢや、夜仕事を以て貰はうとは思ふて居もせぬ、家の爲めと思ふて精出して下さる志は嬉しいが、そなた學問の妨げをしては爲らぬ、遠慮はない、日が暮れたら本を讀んで下されいの」

「本を讀むには油が要ります、自分に得を付ける爲めに、御當家の油を頂いては澄みませぬ」

「はて物堅い、では油代に繩紮うて下さるぢやの」

「眞の九牛の一毛、志ばかりでござります」

「いや、それを聞いては尙の事ぢや、私はお前が學問をする、その油代を惜むやうなものでは無い、どんく〜と火を點して、思ふさま本を讀まつしやれ、お前が爾うして學問をさつしやると、終にはお前の身の光りで村中が明うならうで喃」

金次郎は實に良き主を持ちたりき、善右衛門は金次郎を村一番の物識にして、その光に栢山一村の人、草、樹々の末までを化せしめんと冀ひき

「有難うござります、然しお言葉に甘へては澄みませぬ、私は自分の思ふだけ仕事を以て、自分の思ふだけ本を讀ませて戴かうと思ひます」

往くものはあらざらん、善右衛門は金次郎を正しく黄金と申り付けて雇ひ入れぬ、十四の子供に大人同様の給金を出さんといふを、家の者は皆な嘲り笑ひたれど、小粒にても黄金は貴く、他の雇人には立ち優りて物の用にも立ち

耕作、伐木、夜仕事、總て二人分の働きする上、更に書を読み手習ひする殊勝の心掛を見ては、黄金と思ひたるが夜光の珠にてもありけんやうに、自慢の鼻を高くするなりき、溢れる如く笑ひて

(七)

「へえ」と金次郎は莞爾ともせず「皆様色々な名をお付けでござります」

「キ印といふのう」

「左様にも云ふたやうでござります」

「それから土手坊主とも云ふたのう」

「餘り土手遊びばかり致しますゆゑ、皆様が悪口をお云ひなさるのでござります」

金次郎は繩を縛ふ手を休めず、善右衛門の間ふまゝに答うるなりき

「やはり悪口でござります」

「キ印も土手坊主も、謂れは熟く知れて居るが、ぐるり一遍とは何のことであらうのう」

「お米を舂くからでござります」

「はてな、米を舂くのはお前に限らぬ、米を舂いてぐるり一遍なら、内の男ども皆なぐるり一遍と云はれる筈ぢや」

「それは、斯うでござります、杵が上り下りをする、その中に私の身體がぐるりと廻ります、さうして舊の處へ戻る時、其處に据ゑ付けてある見臺の上の大學を一行ぐらゐづ、讀むのでござります、ぐるり一遍して戻る度に、きつと本を讀みますゆゑ、その様な綽名を付けられたものと見えます、いやもう何と云はれましても、私は本さへ讀めば、それが本望でござります」

「そなた米を搗きながら大學を讀まつしやるかの」

「米を搗く時ばかりには限りませぬ、閑さへあれば何日でも讀むのでござります」

「あアこなた」と善右衛門は感嘆の聲を擧げて「それほどにして本を讀むぢやの」

「どうぞして一人前の人間になつて、先祖の家名が興したのでござります」
「さて何といふて好いか、お前ほどの少年はこの年まで見たことがない、是が悪戯を爲るのでは無し、大學や論語を讀んで聖人の教を知らうといふのぢや、是から毎日二時づゝ暇を遣る、誰にも遠慮せず大きい顔で修業さつしやれ、聞けば此方桂次郎の双紙へ、一日に一字づゝ習へば一年には三百六十五字となるぞこの小僧、と書いたさうぢや、一日に二時、少いやうではあるが一月に積ると六十時、一年には七百二十時となる、キ印といふも、土手坊主といふも、又ぐるり一遍と呼ばれるも、詮ずる處はお前の譽れぢや、お前の譽れは利右衛門殿の譽れ、利右衛門殿の譽れは先代銀右衛門殿の譽れぢや、少しも恥かしいことは無い、子供ながらも酒匂川の土手の手薄いのを氣に病んで、毎日遊びに行て居たといふ、物謙顔に村中をのさばり歩いて、大きい口を叩く人はあつても、お前ほど土手の事に心を懸けるものは無い、されば

土手坊主といふ紳名には、清い光りが籠つてある、ぐるり一遍といふのも爾うぢや、結構に師匠を取て、數々の書物を宛はれても、上の空で遊び暮らすものゝ多い世に、眞の少しの時も捨てず、大學や論語に目を醒らす、まこと少年の手本といふはそなたぢや、松は二葉で棟梁の形がある、やがて五六年も経つ中に、今悪口云ふ者を、土下座させる時が來やうぞ、境を修業さつしやれ、私は何日までもそなたに味方ぢや、私ばかりではない誠を守護の神も佛も、皆そなたの味方に爲て下さる」と詞を限りに云ひ諭して「時に金次郎、お由どのまだ米があらうかの」

「お米はまだ澤山にござります」
「味噌も醤油もあるであらうの」
「私の戴いたお給金で、皆な買ひ調へてござります」
云ふ中に金次郎は豫定の繩を緋ひ終りぬ、時は早や子刻、草も木も眠りに就くべきこの一時を彼は書物に親むなりき

金次郎が岡部の家に奉公して、業を勵み、學に勉めてあるほどに、其年も、空しく暮れて、世は享保元年の春となりぬ、山々は翠の葉、紅の花、白き雲赤き霞の種々に彩られて、鶯の鳴く音珍しく、梅、桃、櫻と次第を違へず笑を開けど、お由の家は貧苦に閉ぢられて、無邪氣なる富次郎の笑顔のみに慰められつ、小川の氷は悉く解けて、瀬を流るゝ水の音清く聞こゆれど、金次郎の身の上に滌ることは無くて、夏も去り秋も過ぎて早くも冬の始めとなりき、今日は氏神八幡宮の例祭なり、里神樂の響きは牙え、巫女の振る鈴の音も静に、若きも老ひたるも皆な噴衣装、髪飾り、華表の内外に集會して、思ひくの遊戯、思ひくの風評、北風は寒く吹けど、日は麗かに、冬の日ながら春の如く長閑に、泰平の象自然と見え渡る

他はみな面白く遊び暮らせど、金次郎は懐に書物を放さざりき、他は皆な噴衣装着れど、金次郎は垢付きたる布子一重なりき、將來の幸福を願ふ心か

中時過ぐる頃、ふらふらと氏神の森近く来る、折柄村の若者共拜殿の前に群りて、棒押し、力競べの最中なりき、

「さア推せ、ぐツと推せ」と肥え太りて逞しき一人がいふ

「いや〜」と一人の丈高きは頭を掉て「もう協はぬ、もう〜協はぬ、此方にかつてびつしよりと汗をかいたぞ」

「弱い奴め、そんな事で春角力の御幣が取れるか、棒押しが閉口なら、角力で来い〜」

「いや〜」と丈高きは手を又んだまゝ、「角力も協はぬ、口惜しいが降参ぢや」

「降参とは情無い、力競べでどんと来いぢや」

「吉よ、甚う大口叩くのう」と群集の間から顔を出すは貫四郎なり、常から力自慢の鼻高々と腕をくりして「是からは乃公が相手ぢや、年は老ても貴様ぐらゐに敗はせぬぞ」

「は、は、は」と肥えたるも手を引きて「私も旦那には協ひませぬ」

「豪さうに大口叩いても、乃公の前へ出ては蛭に鹽ぢや、は、は、は」と貫四郎はいよゝゝ得意「力競べの秘傳教へる、一寸来いゝ」

「いえ」と吉と呼ばれたるはニヤゝゝ笑つて「旦那には協ひませぬ、力に勝てもお金に負けませぬ、世の中に金ほど強いものはござりませぬな」

「此奴感心なことを云ひよる、お前にも金の力が分るぢやの」

「分る段ではござりませぬ、旦那のお身には金の御光が射して居りますがな」

「は、は、は」と貫四郎は又笑つて「何と羨ましいかゝ」

「羨ましいよりは恐ろござります、それから旦那、一寸退いて下さりませここで力競べ致します、お金持の旦那衆は大人しう見物なさるものでござります、而して角力や力競べに勝たものへ、澤山御褒美を下さるものでござります」

「馬鹿を云へ、相手は乃公ぢや」貫四郎は土俵の上に突立ちて動くべき様も無かりき

「諾し、乃公が相手に爲て呉れる」

背後に控えし一人の壯者は斯く叫びて、忽ち大肌を脱がんとしぬ、金次郎はつかゝ寄りて

「お前、何をさつしやるのぢや」

「貫四郎にぶッ付つて、あの鼻柱を挫くのよ、何の金に負けて堪るものか、彼な者、小指の尖頭ぢや」

この壯者は金次郎と同じく善右衛門方に奉公する力自慢の彌作なりき

「いや、それは悪い、止めさつしやれ」と金次郎は石よりも重き調子「こなた力競べがしたいのか」

「力づくで負を取たと云はれては、彌作一代の恥辱になる、さ、乃公が相手ぢや」云ひ捨て、走り出でんとするを、金次郎は力任せにぐツと引き戻しぬ、金次郎は年齒に比べて身丈高かりき、太く肥えたる身體に熱誠の情籠り居れると共に、その力は二三人に敵すべかりき、彌作は大力に引き戻されてたぢたぢと逡迴しながら

「金さん何をするのぢや」

「夫ほど力競べがしたけりや、山へ入て木を擔いで來さつしやれ」

「え、何と云ふな」

「無益な遊びに力を競べて、それが何の補足になる、それよりは山へ入て木を持ち運ぶか、土手普請の石運びをするか、少しは村中の益になることをさつしやれいの」と金次郎は儼然として「それで力競べが爲さる筈ぢや」

「多くの群集は道理ある金次郎の詞を聞いて、一齊に感嘆の聲を漏らしぬ、遊戯にも汗を垂らして出す力なれば、無益なことに費さんは可惜ものなり、山に入りて木を運ぶも、土手に出で、石を持つも、同じ力、同じ勞、然も彼は不用にして是は有用、彼は徒勞にして是は利益、然も力を競べる上に何の相違したる所なし、ぐるり一週巧いことを云ひ居るとは、誰の胸にも往來する考えなりき、彌作もこれに恥ぢて頭を掻く時、眼を險しく、息を機ませて、猛然と進み寄るは貫四郎なり」

(九)

「やい、キ印、土手坊主、ぐるり一週、おぬし利いた風な事をいふのう」と貫四郎は口を歪めて「山へ行かうが土手へ出やうが、お前の世話に爲るのであるまいし、大きにお世話ぢや、自分の口を自分で食ふことさへ知らず、他人の家へ雇はれる分際で、村中の爲もよく出來た、阿呆に付ける薬が無いとは己のことぢや、これ乃公の顔を忘れたか」

「貫四郎様忘れは爲ませぬ、他の人の顔は忘れても、お前様の顔を忘れることはござりませぬ」

「乃公が相手になる力競べを何故止めた」

「彌作は私の朋輩でござります、朋輩の爲ることに心を注げるは、人間の勤務でござります」

「おのれまだ云ふか」と鐵の如き拳を固めて「まだ乃公に楯をつくか」

「私は唯人の踏むべき道を説くのでござります、あなたを相手に爲て居るのではござりませぬ」

「云はいでも知れたこと、云はいでも知れたことぢや、村役人の端にも列な

る貫四郎、高が善右衛門の脚下に匍匐ふ作男を相手にするかよ、乃公の相手に爲らうと思ふなら、一人前の人間になつて来い、一人の母さへ養ひかね、他人様の御厄介になるのを止めて、立派な人間になつて来い、その時は本氣で相手になつて呉れるわ」

大磐石の如き金次郎の胸の底にも、此時ばかりは無念の波暴く立ちぬ、氏の神の社頭、松柏の森々と繁る下、周囲には村の壯者集り、左右には朋輩知人まぎりと顔を見詰むる、この衆人群集の前に、悪口雑言の敷を盡さる、彼は金を持てる悪魔、彼は金色の光り持てる獣、如何なることを云ひ慕るとも、人間の取り上ぐべきことにはあるまじと観念しつゝも、血氣は潮の如く寄せ、怒氣は眼の中に漲り来る、足を擧げて彼の脾腹を蹴上げんかとも思ひ、更に拳を面上に加えんかとも考えしが、いやゝ逸る時にはあらず、彼の云ふ如く我は尙獨り立ちて母を養ふ力だもなきものなり、獨り立ちて母を養ふ力だもなき身を以て、村役人の端にも列なる大人を相手にせんは、理に於て爲し得べきことにあらず、堪忍の要はこゝにあり、尺蠖の屈むべき時期はこゝに

在り、

「やい、土手坊主のぐるり一遍、おのれ之でも言葉返すか、これでも村役人に楯つくか、今一言云ふて見よ、こゝに鐵の拳がある、これがそなた素頭へお見舞ひ申すぞ」

日頃金次郎を土手坊主、キ印、ぐるり一遍と緯名して、卑み輕んじ居たる多くの壯年は、この様を見て快げに手を拍ちぬ

「例には豪さうに知た顔をする土手坊主も、貫四郎様にかゝつては言句も出ぬ、あのまぎととした様を見よ、彼でも男か、彼でも栢山の草分、二宮の後継か、笑つて遣れ」

されど金次郎は此詞だも耳に入らず、尙つくゝと考えぬ

善右衛門様お宅へ御厄介になつてから、もう足掛け二年になる、お蔭で本の五六冊も読み、お給金の二三兩も戴いて、一人の母様と、二人の弟とに餓飢い目もさせず、どうか斯うか月日を送つては来りたれど、云はゞ男と生れたるだけにて日蔭淡なり、藤は美しく花を着くれど、獨り立つ力なければ棟

「この御恩は忘れませぬ、これから後も折々お訪ね致します」

「私も又尋ねる、そなたもきつと来て下され」

「御本を讀んで分らぬ處は、御教授を願はねばなりませぬ」

「私もお前に聞くことがある、毎日一度づゝ逢はうでの」

「どうぞ爾う爲されて下さりませ」

「私はそなたを兄とも思ふ、そなたも私を他人と思ふて下さるな」

「え、勿體無い、何をお云ひなされます、私は御當家の下男、あなたは御主人でござりまするが喃」

「ぢやが暇になれば同じ村人、主も家來も無い筈ぢや」

「二人が問答に時を移す時、主人の善右衛門は莞爾と打ち笑みながら出て來りぬ

「金次郎こゝに居たか、先日から段々の頼み、何日まで他人の厄介になつた處で、面白い夢も見られぬ、ちと心に望みもあれば一本立ちの間人になつて、先祖の家名が興したいとの本願、聞いて見れば無理は無い、由て今日さつぱ

りと暇を進ぜる」

「誠に身勝手ばかりお願ひ申して、澄ませぬことでござります」

「お前の働きで、例年よりは早く米の收穫も終んだ、何か進ぜたいと思ふた

が、さて此といふ思ひ付きも無い、其處でこれは輕少ぢやが、給金の殘部二

百文、粗末な袷衣一枚、受け取つて下されいの」

善右衛門は二緋の銅錢と、一領の木綿袷衣とを金次郎の前へ差し出しぬ、

「これと云ふお役にも立たぬ身へ、結構な下され物、御辭退を申す筈でござ

りまするが、折角の御芳志、御當家御恩を有り難く着るでござります」と兩

手に受けて押し戴く

「爾う云つて下さるほどの物ではない、これは眞の印ぢや」と善右衛門は快

く「口でこそ一本立ちぢやが、十五の小腕に一軒の家を支えるのは容易で無

い、如才はあるまいが何かに心を付けさつしやれよ、五町六町の田地を持て

も、安樂には食ひ難ねる世の中ぢや、そなたの家には何も残つて居ぬといふ

「随分重い荷を脊負はねばなりませぬ」

「聞けば貫四郎一味の者が、随分意地の悪いことを爲るさうぞや、決して相手に爲らつしやるな、白い黒いは正直な眼がよく見て居る

「有り難うござります、貫四郎殿は私の爲めの恩人、私が志を立てますも、皆なあの方のお蔭でござります」

「爾うでもあるまいが、長い物には巻かれよぢや、これから後、不自由な物があつたら、遠慮は要らぬ、さつさと取りに来さつせいよ、わア不憚さうに、家の善太郎などは違つて、そなたはまだ道が遠い」

「どうぞして一二年の中に一本立ちの人間になりたいと存じます」と金次郎は熱い涙をほろりと溢して「旦那様、これでお暇を戴きます」

「身體を大事にさつしやれよ」

「坊様、おさらばでござります」と金次郎は二緡の銅錢を懐中する

「金次郎今云ふたこと忘れてはならぬぞ、そなたの來ぬ日は私の方から尋ねます」

「このお詞を力にして、油断なく修業致します」と金次郎は袷衣を受けて起

ち上る

冬の日は長けて、梅の早咲に陽の光りのつと匂る中、見返り勝に出で去り

(一一)

師走も今は中旬となりて、人の心の天走る雲と共に忙しげに見えたれど、日はのだかに、蝶も舞ふらん野の道を、金次郎は風呂敷包み肩にして、とぼとぼと歩み來りぬ、風呂敷包の中には善右衛門が情の裕あるべく、掻き合せたる懐中には二百文の鳥目もあるべし、母様も待ちてやおはさん、二人の弟も待ちてやあらん、二百文の鳥目にて濫かき併にても春き、久し振りに母子兄弟團欒して箸を取らん、お父様御位牌には御好物のお神酒、この裕お母様にお目に掛けたらば、いかに歡びたまふかも知れざるべし

「もし〜」と聲かけて道の側に松苗容れたる荷を卸せしは、六十路にも餘れる老商人なりき、繼々の木綿衣に、襟の敵れたる半纏を被て居たるが、幾

度か鼻汁を酸みつゝ、「お慈悲でござります、この老人を扶けては下さりませぬか」

金次郎は憐れなる老商人の顔を見、聲を聞き、更にその年紀を考えて、不圖世に亡き父の事を想ひ出しぬ、家道廢れたる後のお父様は、まことこの老商人の如く衰へて在したりき、お父様今も恙なく在したらば、身の皮を剥ぎても彼の時よりは匿しからず爲し參らせんものを、この老人、頼るべき子供なきか、この寒天に松苗賣りて、憐れにも野の末を呻吟ひ歩くよ、と彼は深くも同情同憐の感に打たれき

「爺さん、お前何處から來なされた」

「私かの、私は足柄の者ぢやの」

「遠い處を精が出るの」

「お前の様な若い人に、この老人が無理をいふては澄まぬが、どうぢや松苗買ふてたもらぬか、三年樹で根は確乎と張てある」

「折角ぢやが、松苗買ふても植ゑる地面がござらぬわいの」

「それでは扶けても下さらぬか」と老人は當惑の額を撫で、困つたことぢや、これが賣れいでは宅へも歸られぬ、俵が待ち焦れて居るであらうにの

「爺さん、子があるのぢやな」

「恰どお前位の俵があるが、去年の暮から痛風で寐て居るわいの」

「さて痛はしや、醫師にも掛けてござらうの」

「それで藥代が要るのぢやに……どうぢや松苗買ふて下さらんか、例は朝の間に商ひして、中時までは歸宅、温い粥の一碗も作つて、俵の歡ぶ顔を見るのが、今日はまだ八時を過ぎて、まだ一文の商ひもせぬ、これでは一服の薬も買はれぬ仔義、どうしたら好からうかと、私は途方にくれて居るのぢやに」

「爺さん、その松苗何許で賣らしやる」

「普通なら三百文と云ふ處を、今日の不幸、元價に減けて二百文ぢや、地面が無うては是非も無いが、栢山には人に知られた金満家もあるといふ、こなたの知れた前で、買ふて呉れる人あるまいかの、心當りあるなら世話をして下

され、この老人を扶けると思ふて、……頼みます、と骨立ちたる手を合せぬ

北風に吹かる、者は北風の寒さを知り、冬の水に浸さる、者は冬の水の冷さを知る、金次郎は我身の上につまされて、この老商人を憐れと思ひぬ、苗の價は二百文、然も懐には二緡の銅錢を持ち合せぬ、われに今この二緡の鳥目無くても、家に旦夕の貯蓄あるにあらねど、この老人松苗を賣り得ずば、病中の子一帖の薬をも服み得ざらん、父子二人温き粥にだも有り付かざらん、餓えて食を得ざる苦痛、病みて薬を得ざる悲痛、われは幾度もこの境を出入しつ、歸りて餅を吞く欲だに捨てなば、この老人の艱苦を救ひ得べし、われに松を植ゆるべき地面は無くとも、栢山一村至る處に空地あり、殊に彼の酒匂川の堤防、年々決潰て害を農作物の上に及ぼす、農作物は百姓の命、栢山の村人は水の爲めに年ごと命を奪はれ行く、もし堤防に大樹あらばその根に由りて地固めを爲すを得ん、可しわれこの二緡の銅錢に松苗を買ひ求めて、一には老人の勞苦を助け、二には堤防修理の一助とせん

「人頼みでは心許ない、爺さん、私が買ふて上げやうの」
「え、此方がな」

「さ、こゝに鳥目が二百文、松苗を置いて行かつしやれ」
「此方眞個に買ふて下さるか」と老人は不審氣に「然し、今地面持たぬと云はれたの」

「私の地面は無いが、村の地面はある、心配なく賣らつしやれ」云ふ顔を沈と見て

「此方これを買ふて村の地面に植ゑさつしやるぢやな」

「酒匂川の堤に植ゑる、すれば村の爲めにもなり、又爺さんの爲めにもなる」
「有難いこと、私は四十年來、苗木類を賣て居るが、一反の地面持たぬ人に、幾百本の松苗賣るは今日が始めぢや、殊にそれを堤に植ゑて一ヶ村の害を防がうと云はつしやる、その心がいかにも有難い、本來なら一文のお錢も受けいで、苗木を進げる處ぢやが、それでは悴の薬が買へぬ、由て鳥目は申し受ける、其處で此の苗、どうして植ゑる心ぢやの」

「これは人手は頼まぬ氣、私の手で植ゑるつもりぢや」
「お、此方の手で……夫なら私も手傳ひます、さア直に行かつしやれ」
徳孤ならず隣村の老商人、金次郎の真心に動かされて、彼の松苗を酒匂川
堤防の端に植ゑて歸りぬ、亭々たる老幹、參差枝を交へて、今も彼の堤の上
に蒼鬱たり



第六章

(一)

翌年春お由は風邪の心地として打伏せしが、遂に再び起つ能はざるに至りぬ。金次郎が辛うじて一家の生計を撐え居たるは、母お由の勞苦賃仕事、その大半を助け居たればなり、利右衛門死して後の二宮家は、赤貧宛ら洗ふが如くなりき、家は先祖傳來の結構廣大なれど、その軒は傾き、その柱は歪み、室ごとの戸障子襖は破れ、蜘蛛の巣、鼠の糞、蝙蝠の夢の痕に満たされて、足を容るべき餘地もなかりき、家に耕すべき田地なければ、時には他家に雇はれて小作し、時には小田原に使ひ歩きして、僅の賃金を得居たれど、それにて獨立の生計を營むべきやうは無かりき、さればお由病氣となりて後は、轉に荷の盡きたる車の如く、一家の運轉ばかりと止りて、奈とも爲ること能はず爲りぬ、彼は一本立の人間となりて、貧富の差こそあれ、貫四郎同等の地位を得んとしたれど、十五歳の小腕に一家の生活を把持し行く力は無かり

き、お由の病ひ重り行くに付けて、貧のいよゝゝ迫り来るを知りたる彼は、無念ながら一本立ちの容易からぬ由を覺りぬ。已に獨立經營の見込みなし、母様御病氣御全快の後、再び他家の下男とならん、斯くして衣食を他家に托して、勞役し、學問し、成長して徐々に大望を成就せん。

金次郎は更に斯く覺悟したれど、その覺悟を實行するに至らずして、天地も昏くなるほどの悲嘆に遭ひぬ。

そは藥石效なく、母のお由の死去せし事なり、道齋、善右衛門父子、善榮寺光瑞、金次郎に深き同情を持てる者は、能ふ限りの真心を盡して、醫藥米麥、祈禱の數々を寄附したれど、金次郎の孝行にも、是等の人の同情心にも、人間の常命を取り止める力は無くて、お由は遂に果敢なくなりぬ、後に残りしは三人の子の涙のみ、半ば朽ちたる家屋のみ。

貧しき親戚と、疫癘ある人の家には、成るべく近寄らぬを當世と心得居れる近親縁者も、斯くと聞きて悉く集りぬ、葬式の事終りて、まづ人々の議

に上りしは、二宮家の後始末なり、三人の子の處分なり。

佛壇には白き位牌又一つ増えぬ、涙の華は兄弟の手して更るゝに供へられぬ、金次郎はいかにもして一本立の身とならんと焦思しが、一文の貯蓄も無く、一反の田地も無く、乞食の徒にも入り難き系裔持てる身の悲しさは、いかに工夫すとも其效なく、母を失ひたる涙まだ乾かぬ中、親戚會議の結果として、金次郎はお由の從弟に當る村内の農家萬兵衛の家に引き取られ、三郎左衛門と富次郎とは、曾我別所村川窪太兵衛の家に養はるゝこととなりぬ、太兵衛は利右衛門の甥にして、金次郎兄弟とは從弟なり。

父に別れ、母に別れ、賣り残せし田地に別れ、更に二人の弟に別れたる金次郎は、母が満中陰の忌日を経たる翌日、あはれにも萬兵衛の家へ引き取られぬ、善右衛門も權右衛門も下男として雇ひ入れたき由云ひ入れたれど、金次郎は従はざりき、無給金にて逐ひ使はんとする萬兵衛は従はざりき。

金次郎は我家を出づる時、その懐へ二基の位牌を藏め行きぬ、宵々ことに取り出して、心ばかりの香華を手向けんと思ひたればなりき。

三郎左衛門も富次郎も、兄の袂に籠り付きて、私も一所にくと泣き叫ぶを、金次郎は心強く叱り付けて、遂に右と左とに別る、叱る目の底には涙満ち、別れて歩む足並はしと、亂れぬ、住み馴れし家の次第に遠くなるを見て、金次郎は幾度も立ち止まり、心の中に先祖代々の靈魂を呼びて、わはれ二人の弟を守らせ給へ、二人の弟を別條無く成人ならしめたまへ、私今萬兵衛様に伴はれて、御先祖の家を去るとも、心は何日までも家の棟に残りて、家再興を忘れる時は在すまじ

(二)

金次郎が萬兵衛に事うることの厚きは、曾て善右衛門の家に仕へて、善右衛門一家に仕へたる如く厚かりき、朝は天の明け切らぬ中に起きて、近く遠き山々に木を樵り、馬を逐ひて歸る道すがらは、手に大學論語を放たざりき、野に出で、は耕作に身を惜しまず、土手普請の勞役に代りては、人々の二分を働くやうにしたれど、萬兵衛は遂に笑顔を見せざりき、給金の要らぬ下

男を雇ひ入れたる如く思惟せる彼は、唯金次郎を無非道に追ひ使ひき、金次郎の勞役に由りて多少の得分を得んと思案したれど、金次郎に讀書させて金次郎の心を玉になすべき心はなかりき、善右衛門の家に奉公せし時は、周圍を繞れる同情の温みに育てられて、主動めは辛からぬ者と思ひしが、萬兵衛の家の厄介に爲りては、家人の心の冷たきに取り巻かれて、肉身の血は温からぬものと思ひぬ

されど、彼は毫恨みたる氣色もなかりき
親類の家に養はれて給金を得んとするにもあらず、又日々の仕事に追ひ使はれて、これを辛しと思へるにもあらず、唯一日中に爲べき仕事を終りて、他は臥床に入りたる後、その身は二時三時の閑を得て、書を讀み手習ひするを得ば此に越えたる幸福は無しと思ひき、由て其事を萬兵衛に願ひ出でぬ、萬兵衛は今夕方の二合半酒に陶然として、相手欲しく烟草燻らす時なりき
「叔父様、私あなたに願ひがあるのでござります」
「金次郎、改つて何を云ふのぢや」

「人間と生れて字を知らぬ者は、犬にも畜生にも劣るでござります、それで私、毎晩お仕事を終ふた後で、御本を讀ませて戴きたいと存じます」

「は、ア、お前は妙なことを云ふのう、すると私は人間でも無いと卑むぢやの」

「爾う云ふ理ではござりませぬ、なれど人間と生れた甲斐には、誠の道が知りたいたいものでござります」

「いや爾うぢや、私を犬畜生にも劣るといふのぢや」と萬兵衛は烟草の脂に黒くなりし唇をへんの字に歪めて「私はいろはのいの字を右から曲げるのか左から曲げるのか、それさへもよく知らぬ、けれどまだ他人様の軒下で残り物を貰ふた覚えは無いぞよ、庄屋様からお地頭様からも、犬畜生と罵られたことは一度も無いぞよ、聞けばそなたは山へ入て仕事した歸りにも、歩きながら本を讀むげな、善榮寺の和尚さへ問ますほどに、四角な字も知るとるげな、ぢやが自分一人の口が養はれいで、乃公の厄介になるやうでは仕方ないでなにか、いくら本を讀んだ處が、四角な字を切り抜いて、飯の代りに食べられ

るものでもあるまい、詩を作るなら田を作れぢや、百姓は百姓で一石の米を一石二斗穫取るやうにすれば、それに上越した手柄は無い、人間と呼ばれて他の厄介になるよりも、犬畜生と卑められても人の世話をするが優ぢや、此方も十六、前髪を落した身が、いつまで話らぬ夢見て居るのぢや、止しにさつしやれ、止にさつしやれ」

「あなたは其様にお云ひなされませすが、同じ茄子を作るにも、捨て作りにするのと、肥料を遣るのは、穫收の上に大分の相違がござります、人間が本を讀み字を習ひ、學問修業致すのはつまり茄子に遣る肥料でござります、同じ生物でも肥料を遣ると遣らぬのとは、第一色光澤から違ひます、お宅の仕事に手を缺きは致しませぬ、皆様がお休みなされてから、二時ほどお閑を下さかせ、その間に少しづつ本を讀みます」

「さて困つたもの、お前の本好きは病氣ぢやのう」

「病氣にもなされませ、願ひさへ協へば何んな辛い奉公でも致します」

「その代り益正月、春秋二度の祭典、他の者には閑を遣つても、そなたは閑

を遣らぬぞ」

「はい、少しも休みたいとは思ひませぬ」

「それからが小使錢ぢや、そなたの願ひを聞くかはり、一文でも遣ることは無い、これも承知であらうのう」

「百文のお鳥目を戴くよりも、一時のお暇を戴くを、私は辱う受けるでござります」

「それを承知なら、毎晩夜仕事を終ふてから、二時づゝ暇を遣る」

「はい、有難うござります、お蔭で天下晴れて御本讀むことが能きるでござります」

(三)

一穗の燈火に夜は更けて、何處より漏れ來るとも無き花の香、紛々として金次郎が大學讀む面を撲らぬ、彼は是と定まりたる師を取りしにもあらず、食しき中に獨學して今は大方の意義を解し得るまでとなりぬ、同じ章句をく

り返し、讀み試つゝ、時に會心の條に到ること「此處ぢや」と大聲舉げて叫ぶが例なりき

「金次郎、何をして居る」

も早や寐ねたりと思ひし萬兵衛が皿の如き眼を光らせて、納戸より出で來りぬ、金次郎は騒きたる様もなく

「お蔭で學問修業するでござります」

「お前も八歳や九歳の子供では無し、少しは物を考えるが好いで無いか、お前一人を養ふにどれほどの入費が要ると思ふ、日々の飯米、衣服、草履、一々帳面に付け出したら、お前の小腕で働く位、十分の一にも足りることでは無いのぢや、それに仔細らしう書物を讀むの、手習ひをするのと、馬鹿盡すにも程がある、好い加減にして置けやい」

「それでも叔父様、毎晩二時づゝ暇を遣ると仰せなされたではござりませぬか」

「暇を遣るとは云ふたが、油を遣るとは云はぬ、この上乃公に損を掛けて、

それで澄むと思ふて居るか

「噛み付く如き詞、睨み殺すべき眼光、上り框に突立ちて、大聲に叫き立ちぬ」

「真に左様でござりました、私は其處まで心付かぬでござりました」

「おのれ住む家もなく、作る田地も無く、人の厄介に爲りながら學問して何んの用になる、止めてしまへ〜」

「然し、油さへ費さねば、二時づつのお暇下さるでござりませうか」

「一たん約束した事ぢや、閑は遣るが油は遣らぬぞ」と云ひながら金次郎の書見臺に爲し居たる石臼の側へ進み寄りて、ふいと燈火を吹き消しぬ、後には金次郎の吐息、脈々と戸を漏るゝ花の香り、萬兵衛は口の中に何事をか吐きつゝ、元の納戸へ入り去りき

燈火は消えたれど、金次郎が學を思ふ志は燃え立ちき、假し如何なる艱難に遭はんとも、筆道文學に心懸くることなくば、一生文盲の人となりて、父祖の家を興す時はあらざらん、昔は雪の明り、螢の光に苦を照らして一代の

學業を成し遂げたる人ありと聞く、書を照らす燈火は無くとも、心を照らす大空の月無からんや、いで〜と云ひ掛けて雨戸さつと開くる軒の端に、一輪の皎月鏡の如く高く懸る

その夜はこの月を明りにして、兎も角も文を読みつゝ、されど月は何日の夜も清しといふにあらず、時には雲の煩ひあり、又時には影淡く、文字を照らす力無き事もあり

されば月は永久の燈火にもあらざりき、萬兵衛の家にありて、夜なく〜二時の暇を得る外勉學の暇なき身は、いかにもして燈火の用意せざるべからず、いかにもして學問の道を得ざるべからず、彼はさまざまに思ひ廻らして、油を得べき方法を考えぬ、

(四)

十里の土手長く續きて、川縁の雜草宛ら青き蓆を敷き詰りたるが如く繁れる中に、二三畝の圃を作りて、盛んに油菜を植ゑたるものあり、折から春は

最中、蝶の翼の軽々と風に翻へる下、一面の黄花、香りは海の如く深かりきに酒匂川の水を汲みて、丁寧に油菜の根本へ灌ぐ、春の日はまだ落ちず、菜の花は水の恵みを得て、更に活々と人の心を牽く

金次郎が水を灌ぎ終りて、川端に立ちたる時、堤の上を通り掛りしは岡部善右衛門と、その子の善太郎なりき、金次郎を見て側へ寄りて

「金次郎、何をして居るな」

「お、岡部の旦那様、日頃は御不沙汰ばかり致しませす、坊様も相變らず御健康でござりませするな」

「お前何日見ても元氣ぢやの」

「お蔭様で風邪一つ冒くこともござりませぬ」

「それは重強ぢや、兎角人間は健かたで無うてはならぬ、千萬兩の黄金を抱いて病み患ふよりも、貧乏で健康な方が、どれほど幸福かも知れぬでござりませぬ」と云ひながら金次郎を見て「私は土手を通るとに爾う思ふが、この油菜、誰

がこゝへ作つたかの」

「私でござりませす、御存じの通り田地持たぬ身の悲しさ、この川縁を借用したのでござりませす」

「はて、川縁を使ふのも好いが、麥の一畝も作ることも、用に足りさうもない油菜、こなたこれ何うさつしやる」

「これで油を取るつもりでござりませす」

「油を取る、はて油を取るとお云ひぢやの」

「お宅に御奉公致して居る間は、快う夜學の燈火を下されませしたるが、唯今は爾うも爲りかねませす、それで漸う月明りで御書物讀むでござりませするが、雨の夜もござりませす、暗の夜もござりませす、その間學問を廢めねばならぬが残念さに、この菜種から油を取て、切て毎晩御書物讀みたい望み起したで、毎日水や肥を造て居りませす」

善右衛門の眼からは、はら／＼と感涙落ち來る、その涙の眼に善太郎を見返りて

「これよ、今の金次郎詞を聞いたかよ、學問手習ひするに燈火が無いといふて、この川縁に油菜を作つて居る、その素直な心、その殊勝な心、燈火の助けは無くとも、心の光りで四方八方が明らうぞよ、金次郎に比べると前などは宛然大名のお學問なさるも同じ事ぢや、罰が當る、罰が當る、金次郎の志を助けて遣らつしやれ、三百文五百文は目にも見えずひざゝ費ひ果すが常ぢやが、それが金次郎の手へ入ると、五合八合の油となつて、十日二十日の燈火となる、油は假へそれで盡きるも、金次郎の心に宿つた學問は、やがて村中の光りとなつて人の上を照らさうに、そこに小使を持って居やう、それを金次郎に遣らつしやれ」

「お父様、私はこゝに有るだけを金次郎に遣はしませす」と善太郎は懐より財布を出して金次郎にさし付け「これは眞の輕少ぢやが、私の志ぢや、受けて下さるまいか」

「え、滅相も無い、あなたからお金戴く筈はござりませぬ」

「さほど辭退さつしやる程のものではない、どうか此で油を買うて下され」

「折角のお詞ではござりませするが、私は理も無く他人様からお金戴くが大嫌ひでござりませす」と金次郎はきつぱり云ひ切つて、善太郎の差し出せる財布を見向いても見ざりき

「お前私を他人と思ふて居るぢやの、お前が私の宅から暇取で出る時、是からは兄弟同様にすると云ふたを、もう忘れて了やつたの」

「いえ、左様ではござりませぬが、假し兄弟でござりませうとも、お金ばかりは唯受けぬ心でござりませす」

「物堅いにも程がある、是ばかりの物、受けて下されても好いではないか」

「お志は受けても、お金は受けませぬ、失禮ながら私は乞丐ぢやござりませぬ」

菜の花は芬々として香り、瀬々の水は潺々として流れ行く、斯う云ひ切つて金次郎は暫く無言、善太郎も又財布持ちたるを、詞無かりき、善右衛門は笑ひ掛けて

「どうも話が落ち着かぬ様ぢや、善太郎もお前の事を乞丐といふたでは無い

に、悪う思ふて下さるなよ」

「お志には泣くほども感じてござります、然しお金は働いて利けるもので、他人様から唯戴くものではござりませぬ」

「夫も爾うござや、他人の金を受けるほどなら、此方も是ほどに苦勞せぬ筈ぢやでの」

「おア悪い事を致しました」と善太郎は以前の様に財布を懐中して、金さへ與れば人は皆な頭を下げるものと思ふて居たのが、私の過失でござりました、お金を放れて實を見せる道は他にあつたでござります」

「お、好い處へ心附いた、お金よりは誠ぢや、金で動かぬ心も誠には動くものぢや」と善右衛門は和めるやうに云ふ

「坊様失禮なことを云ふ奴と、お氣にお障へ下さりますな、これが私の魂の私的宗旨でござります」

「好い宗旨ぢや、私も信心しやうかの」と善右衛門は笑ひながら「そんな事を氣に障える件ではない、夜分には些とお出で」

「有難うござります」

「爾うして手習ひは何うさつしやる」

「お宅に御奉公申して居る間は、坊様のお雙紙をお分け下さりますので、紙に習ふてござりまするが、唯今は一枚の紙もござりませぬゆゑ、この河原の砂利を持ち歸つて、その上へお稽古を致します」

「やればはれ愛い事、さらば筆も持たいで」

「へえ、細い砂利を盆に盛つて、その上へ箸で字を書くのでござります」

「何といふ、苦しい學問をさつしやるのぢや、萬兵衛殿も聞こえぬ、それは金を鉛にして使ふのぢやがな」

「お父様々々」と善太郎は慌しく呼び掛け「もう一度内へ來て貰ふては何うでござります」

「爾うは云ふても物堅い金次郎ぢや、容易には來て呉れない」

「坊様のお志、有難くは受けますが、親類の厄介に爲て居ながら自儘なことは能きませぬ」

「それなら毎晩家へ来て、學問して下されいの、家には行燈も點してある、私の古いお雙紙も澤山あるのぢや」

「御心切によう被仰つて下さりませ、然し私は亥刻まで夜仕事せねばなりませぬ」

「私も亥刻まで夜仕事して、それからお前を待たうわいの」

「坊様、あなたは私を……」と金次郎は感に堪へざる如き聲、圓き兩眼を涙の底に深はして「それほどまで……夫ほどまでに思し召して下さるのでござりませるか」

「それはお前……それはお前……」と善太郎もおろ／＼して兄弟の間ぢやもの、身を殺いでもお前の爲になりたいと願ふのぢやわよ」

「え、坊様」と金次郎は我を忘れて、善太郎の手を取りしが「この御恩は忘れませぬ、死んでも忘れる事ではござりませぬ」

日は名残無く暮れて、夕儀暗く山の裾より深う爲り行く



第七章

(一)

「へえ、旦那様」と門口から裡を覗きて「金次郎でござります」

金次郎は早や十八の春を迎えぬ、親は無くとも子は育ちて、萬兵衛が無慈悲の苛責に泣きながら、足掛け三歳の春秋を送りぬ、身丈はいよゝ高く、色白く肥え太りて、清しく圓き目の中に、神々しき希望の光り満ちて、身に着けたる木綿布子にも宛ら輝きあるが如く見ゆ

出居の間の獅喘火鉢に身を凭せて、徐に烟草を燃らせ居たる善右衛門は、我子の來りしを歡ぶが如くに笑みを傾け

「朝早くから……今日は休みか」

「是から山へ參るでござります」と云ひながら懐中を探つて、御面倒様ながら又これをお預りなされて下さりませ」とさし出すは一緡の錆錢なりき、善右衛門は見て

「銅錢百文確に預る、これは何うしたお錢ぢやの」

「菜種を賣つた残餘のお錢でござります」

「さうか」 と善右衛門は頷いて、日外から大分預つて、もう八九百文になつて居る」

「切て二三貫文は貯めたいと存じます、御面倒ながらお預りなされて下さりませ」

「他ならぬお前の事ぢや、頼みとあれば幾許でも預るが、この金を何うさつしやるな」

「ちと入用なことがござります」

「どうぢや近頃は萬兵衛殿も、お前の學問を大目に見てお在でかの」

「お蔭様で大した叱言も聞きませぬ」

「お前の手で油を買ふので、萬兵衛殿も安心してお在と見えるの」

「近頃は筆もお雙紙も、どうか斯うか調へるのでござります」

「それは結構ぢや、何でも人間は自力で稼いで自力で立ち行く心掛けが無う

てはならぬ、萬兵衛殿の厄介には爲つて居ても、苦しい中から菜種を作り、麥を作り、それで自分の用を辨じる、私はお前の心掛に感して居る、精出して學問さつしやれ、良い心掛けには必然良い報ひがあるのぢや」

「それでは何うぞお願ひ申します、朝早く御面倒を掛けてござります」

「金次郎は曾て酒匂川の川縁に油菜の幾畝かを作りて、八升餘の燈油を得、それに夜ごと學の庭を照らして、誰に氣兼ねなく習字讀書に耽りたるより、

従來に草原なりし川縁が、金次郎の閑あることに耕耘さるゝ畑地となりて、

或は芋、或は大根、或は菜、或は麥、と次々に培養せられて、今は長く一反

にも餘れる耕作地となりつ、金次郎が學問の爲めに費す燈油、筆、紙、その

他の雜費は、優にこの耕作地の收入をもて補はれ、更に餘れるを善右衛門の

手に預けて、二三貫の高に上るを待ちぬ、彼がその金子を何事に費すかは後

日の問題として、近頃の金次郎は正しく希望の光に満たされき

金次郎は道行く中も大學を手に放さず、徐に馬を逐ひながら春の野道を山

路近くへ歩み來りぬ、折柄彼方より來掛りしは、善榮寺の住職金瑞和尚なり